新春随想

北見赤十字病院に勤めた31年
北見医師会　小沢達吉

神様、仏様、患者様
帯広市医師会　坂井敏夫

熱中イトウ釣り師
宗谷医師会　高木知敬

新春に想う－受身の忙しさ－
札幌市医師会　大平整爾

感謝力を磨く
函館市医師会　水島豊

丑年生まれでございます
札幌市医師会　池下照彦

父の思い出
札幌市医師会　今村重孝

4度目の年男
札幌医科大学医師会　永井和重

奈良から月寒に
札幌市医師会　加藤成美

新春瞑想
小樽市医師会　本庄高司

北見での初めての新年とピアソンご夫妻のこと
北見医師会　吉田茂夫

函館に至るまでを振り返って
函館市医師会　石川聡

一石五鳥のうまい話
千歳医師会　脇坂明美

温かな笑顔　Smiling Face
札幌市医師会　濱田啓子

フランスを旅して
札幌市医師会　黒田せつ子

我がゴルフ
苫小牧市医師会　三好幸宣

神経内科医とは？
旭川医科大学医師会　油川陽子

私のゴルフ履歴
札幌市医師会　妹尾秀雄

シンクロニシティ（意味ある偶然）について
芦別市医師会　木津明彦

歩くこと、歩きながら考えること
苫小牧市医師会　石間巧

トメさんのこと
函館市医師会　石井敏明

趣味と実益はなんと地球の裏までも
岩見沢市医師会　加地浩

牛の舌
函館市医師会　金井卓也

牛を喰らう会
小樽市医師会　堀田浩貴

サプリメントの好きな日本人
札幌市医師会　景浦暁

経済至上主義という宴の終焉
札幌市医師会　堀川博通

宇宙開発への「希望・きぼう」
札幌市医師会　田中信義

もしも望みが叶うなら
空知南部医師会　梶良行

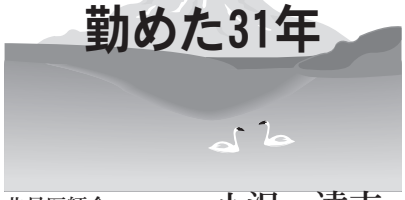
北海道沖縄会のこと
札幌市医師会　黒田練介

丑年生まれの揃い踏み
帯広市医師会　長瀬勇

シニカルな視線…サイレントマジョリティの一員として
江別医師会　小川孝

（順不同・敬称略）

北見赤十字病院に勤めた31年



北見医師会　小沢　達吉

北見赤十字病院に昭和52年夏着任しました。当院は内科、小児科、外科、産婦人科、精神科の5科からなり、医師数は全部で16人でありました。着任直前になって一緒にやっていく予定であった医師が病気で倒れたと聞いた時はかなりのショックでありましたが、7月31日夜初めて北見の土を踏むことになりました。

外科は1カ月交代で大学から派遣されてくる医師と新卒の医師の3人で構成されていました。整形外科、眼科、耳鼻科、皮膚科、泌尿器科などは大学から週1回1泊2日で派遣されてきており、留守中の診療は外科の担当でこれはかなり辛い経験でありました。

その当時は北見は陸の孤島といわれていたように、車で旭川まで3時間、札幌まで4.5時間かかり、近くに緊急時に転送する病院がなく、かなりの部分まで自分のところで治療を完結しなければならず、その結果いろいろな手術を経験することができて、外科医としてやりがいのある仕事ができたと思っています。手術にあたって一番注意したことは安全性でありました。一例を挙げれば膵頭十二指腸切除術についても当初は膵腸吻合で行っていましたが、途中から膵胃吻合に切り替え約100例施行し、縫合不全はゼロでありました。新しい知識は学会の出席、大学図書館、インターネット等を通してほぼ得ることができました。

平成13年からは院長職になりましたが、折から医療は大変厳しい環境の中にあり、さまざまな時代に沿った改革をやらねばなりませんでした。まず病院機能評価機構の受審があります。機構側の理念は安全な患者中心の医療であり、廊下の手すりの取り付け、中待合の新設など建物の改築から始まって実にさまざまな改善を行った後受審しました。一部不備があり多少遅れましたが平成16年春認定を受けることができました。

臨床研修医制度では有名大学からの応募がありマスコミで取り上げられたりもしましたが、研修医にとってはできるだけ実際の診療に参加することであり、当院は医師の数が少ない上に、オホーツク圏のセンター病院として、さらに一次、二次救急に加え救命救急センターであることから症例が豊富であり、十分に研修医の期待にそえる環境にあったと思っています。開始以来毎年10名以上が研修しています。病院機能評価の受審、研修医の受け入れ、いずれも職員が懸命に努力してくれた結果であり、おおいに感謝しております。

昨年早々に循環器内科、消化器科を除く内科医がほぼ全員退職するという事態になり、難病連などを中心に大変な騒ぎになりましたが、当院の場合近くに代替の病院がないことが大きな問題に発展したと感じています。

現在どこの病院でも勤務医不足は深刻な問題であり、ただ医師養成を増やすだけでは全く解決できないと感じています。原因は多岐にわたっており、それぞれについてしっかり原因を究明した上で対策を考えていかなければならないと思います。

北見赤十字病院は建物の老朽化が進み、近い将来新築移転しなければならない状況にあり、病院の向かい側にある市役所が移転の可能性があったことから是非ともその地に移転できることを切に望んでいましたが、最近の市議会で3分の2にわずかに1票差で市役所の移転案は否決され現在のところ白紙状態になっています。

日赤の移転先として市の中心部に適当な土地がなく、郊外に建てることになると、患者の利便性の低下はもちろんのこと、1,000人近い職員のほとんどが通勤距離が増えることになり、時間的にも経済的にも大変な損失となります。さらにまた、医師の病院選択は全く自由裁量にまかされている中で医師が選びたくなる病院作りをするためには、是非とも市の中心部に建て、環境的にも機能的にも素晴らしい病院ができることを切に望んでおります。

本会では、例年新年号に「新春随想」を企画し、年男・年女に当たられます会員諸氏より無作為に選定させていただき、執筆をご依頼申し上げております。

時節がら、ご多忙にも関わらず、ご寄稿いただき感謝申し上げます。

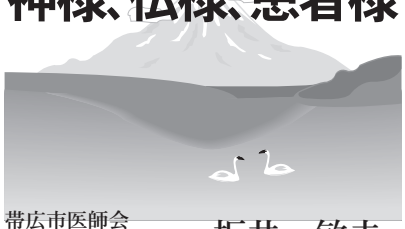
北海道医師会会員数は、男性7,656名・女性806名の合計8,462名(11月30日現在)。そのうち丑年生まれの会員は別表のとおりです。

◇情報広報部◇

(名)

	男性	女性	合計
36歳	86	12	98
48歳	215	20	235
60歳	211	15	226
72歳	109	3	112
84歳	100	9	109
96歳	2	1	3
合計	723	60	783

神様、仏様、患者様



帯広市医師会
大江病院　坂井　敏夫

いったいいつ頃から、患者さんを『患者様』と呼ぶようになったのでしょうか。

今ではおそらく全国的にかなり多くの病院や医院で日常的に『患者様』と呼ばれていると思われます。というのも、最近の医学雑誌で『患者様』に関する投稿を何度も見かけたからです。しかも、大抵は批判的なものが多く（医者からのものでは）、なかには『患者様』からも「気持ちが悪いからやめてほしい」という意見もありました。

それではどうして患者さんを『患者様』と呼ぶようになったのでしょうか。それは、多分このところ大流行の接遇研修の影響が大きいようです。元々接客業の世界で行われてきたお客様への言葉使い・対応のノウハウが、一種の接客業である医療の世界に導入されたためだと思われます。

確かに学ぶべきことはたくさんあります。しかし、いわゆる接客業と私たち医療の世界の対人関係はまったく同じとは言えないと思います。

たとえば、デパートやお店に買い物に行ったり、飲食店に食事に行ったり、乗り物を利用して旅行に行くことは、基本的には楽しいことのはずです。そんな時に丁寧なもてなしを受けることは気分も良くなりますし、また利用しようという気持ちにもなります（中にはやかましすぎる挨拶や馬鹿丁寧な対応にうんざりすることもありますが）。そういう状況では、亡くなった三波春夫ではないですけれど、確かに『お客様は神様』なわけで様付けで呼ばれることにもそんなに違和感はありません。

ところが、医者には行かないで済むなら誰も行きたくないわけです。救命救急的な状況で救急車で運ばれる時以外は、不安な気持ちで嫌々ながらやむを得ず行くことになります（中には例外的に楽しみにしている人もいるかもしれませんが）。

◇

確かに、私たち医療の世界も患者さんが来なければ経営は成り立ちません。その点では接客業と同じなわけです。しかし、決して『お客様は神様』的な考え方をしているわけではありません（そういう医者もごくまれにはいるかもしれませんが）。私たちが患者さんを診察する時は、病状をチェックし、必要な検査を想定し、診断をつけ治療を考えるわけですが、一方で本人の不安な気持ちをくみ取ることがとても大切になります。日本医大の竹内先生はこんなふうに言っています。

「人は病気だから医者にかかるのではなく不安だからかかるのだ」

そのことを通して信頼関係を築くことに、私は何よりも重点を置いています。そういう状況で患者さんに対して他人行儀に様付けをすることに、私は大きな違和感を感じます（ちなみに当院では外来の看護師は様付けで私たち医者はさん付けで呼んでいます）。

ただ、患者さんから医療従事者の態度に対して多くの不平や不満があるのも事実です。

いわく「十分に話が聞いてもらえない」「説明が不十分でよく理解できない」「態度が横柄だ」「見下されているように感じた」等々。

フランスの哲学者ミッシェル・フーコーは「情報の差が差別を生む」と言っています。実際、私たちは患者さんより、知識や経験を含め多くの情報を持っています。そのことから患者さんより優位な立場に立っていることを常に自覚し、謙虚で誠実な態度で接することを決して忘れてはならないと私は思っています。

要するに、言葉の背景にある私たちの姿勢や態度こそが問われているのではないでしょうか。

そういう観点から、謙虚さと誠実さを忘れずに、これまで同様そしてこれからも『患者様』にはさん付けで、私は接するつもりでいます。

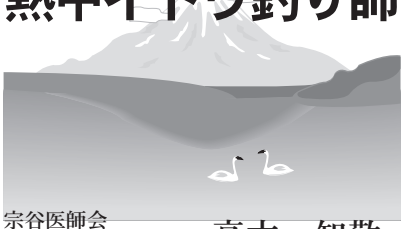
話は変わりますが、かつて西鉄（今の西武）ライオンズに稲尾和久という剛腕投手がいました。年間に40勝以上したり、日本シリーズで巨人相手に3連敗の後4連投し4連勝したり、今の野球界では考えられない活躍をしました。当時のファンやマスコミは、そんな稲尾に対して『神様、仏様、稲尾様』とたたえました。私にはそのイメージが強いので、様付けすることは特別な尊敬や敬虔な気持ちがあってこそ自然な表現になると思っています。

どう考えても『神様、仏様、患者様』とはなりません。

ちょっと危ない表現になりますが、『患者様』は亡くなって初めて『神様、仏様』になるのです。

（ちなみに昨年夏頃の朝日新聞に埼玉県のある病院が様付けを始めたところ、患者様から猛反対があって、結局患者さんに戻ったという記事が載っていました。）

熱中イトウ釣り師



宗谷医師会
市立稚内病院　高木　知敬

世の中にはさまざまな熱中人がいる。私は熱中イトウ釣り師だ。我ながら熱中度はハンパではない。日常生活、診療以外の時間はすべてイトウに賭けている。

流行病のような一時的な熱中ではない。私は小学校入学前から釣りキチ少年であったし、19歳で北海道に来てからもずっと釣りは続けてきた。人生はまもなく60年に達するが、釣り歴はそれから5年も引けばよい。

熱中度に拍車がかかったのは、宗谷で熱中に値する釣魚イトウを知ってからだ。市立稚内病院に外科医として赴任したのが平成元年だから、私のイトウ釣り師としての年季は分かりやすい。まもなくイトウ歴20年である。

イトウ釣りは、なにしろ相手が幻といわれるほど希少なので、まず忍耐が要る。しかも寒冷な湿原や原野での闘いなので、釣り場までに体力も使う。一回や二回の釣行で釣れないのは当たり前で、一生に1匹めぐり逢えれば幸せという釣り師もいる。

「なぜイトウに魅かれるのか」

その理由は、一に日本最大の淡水魚という大きさ、二にとにかく釣れないという希少価値、三に野武士のような独特の風格である。しかし、釣り師の喜びはそういった杓子定規な表現では言い尽くせない。

一度、イトウを掛けてみれば、身体全体でその迫力を体感することになる。私はルアーという疑似餌をナイロン糸の先に結んで、竿を振って投じ、水中を引いてくるルアー釣りをやっている。ルアーの着水からピックアップまでのどこかの瞬間に、「ドカン」と衝撃がくる。竿から手に受ける衝撃は、ほとんど大型犬の走りをロープで必死にこらえるに相当する。巨大魚が掛かって、水面にその姿を現すまでの時間は、興奮と期待と不安が入り混じった至福のものだ。交感神経は緊張の極に達し、脈は早鐘のように打ち続ける。呼吸は速くなるか、逆に止まっていることもある。パワーを失って水面に浮上したイトウを大タモですくいとる。体長・体重などを計測し、写真を撮ると、できるだけ早くイトウを川に放つ。一度も持ち帰ったことはない。それが絶滅危惧種である貴重な魚を釣るマナーだ。

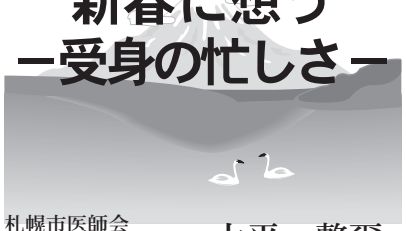
私は元南極観測隊員なので、データを記録して残す習性が身についている。1994年から2007年まで釣った1,157匹のイトウについては、詳細な記録をつけた。それを根拠に、宗谷のイトウは減ってはいないと主張している。大きさは100㎝ から16㎝ まで大小いるが、平均は48.9㎝で、若魚が多い。これは世代交代が順調に行なわれている証拠であり、釣れるのが老いた大魚ばかりになると、その種は絶滅に近い。イトウを釣りながら生息状況を観測することは、「イトウを保護するために釣り続ける」ことに通じる。

イトウに関しては、相棒の写真家・阿部幹雄との共著で「イトウ　北の川に大魚を追う」(山と渓谷社 1999年）と「幻の野生　イトウ走る」(北海道新聞社　2002年）の二冊の本を書いた。あまり売れなかったが、一部のイトウファンにとってはバイブルとなっている。釣りや淡水魚に関心のある方には一読をお願いしたい。現在、市立稚内病院の釣りクラブ「イトウの会」では、ホームページを運営していて、その世界ではトップの支持を得ている。医師としての私は自慢できるものはなにもないが、イトウ釣り師としては無名ではないだろう。

医師という職業人は地球上どこでも仕事ができる。私は京都生まれで京都育ちだが、医師としての職歴では、ほとんど道内の田舎にいた。田舎にいることが苦痛ではない。素朴な人びととの触れ合いが楽しい。頼りにされる喜びもある。稚内に来る前は、地球上でもっとも過疎地である南極で二回越冬して働いた。私は日本で最北と最南の病院に勤めた三人の医師のひとりだ。最北はいまの市立稚内病院、最南は昭和基地の医務室である。

いまの若い医師をみていると、どうも思考が画一的で視野が狭いようにおもう。医師免許証を持ってさえいれば、人生に面白いことはいっぱいあるぞと教えてやりたい気がする。

新春に想う
ー受身の忙しさー



札幌市医師会
札幌北クリニック　大平　整爾

70歳稀ならず：唐の詩人・杜甫が「人生七十年古来稀なり」と吟じて以来、70歳を古希と称する。杜甫(712-770)自身は58歳で没しているが、この時代の平均寿命は70歳をはるかに下回っていたのであろう。国勢調査や総務省の統計をみると、2008年で日本総人口に占める65歳以上の人口は22.1%で70歳は16.0%であるという。70歳が杜甫の時代とは違って決して古来稀なりとはいえない世紀に生きているのだが、70年はしかし短くはない期間ではあろう。長寿社会の到来を改めて自分のことを含めて実感しつつ、70年を恙なく過ごしてこられたことに感謝したい気持ちで一杯である。まず、健康な心身を与えてくれた両親に対してであり、加えて長きに渡って陰に陽に自分を支えてくれた多くの人々へである。

年齢と共に変わってきた役向き：外科医として先輩に教えを請いながら夢中で手術に勤しんだ時代を経て、年齢と共に役向きは少しずつ変わってきた。院内の取りまとめや院外の仕事などの職務が経年的に増えてきたことを今思い返す。種々雑多な仕事とは言っても、大半は医師として外科医として直接・間接に関わりのある仕事であり、ごく狭い範囲での役割を分相応に果たしてきたに過ぎない。井の中の蛙は大海（世）を知らずに過ごしてきたきらいがある。

忙しさの内容：忙しくないという医師など居はしまいが、その内容は人それぞれで千差万別であろう。私自身の忙しさのかなりな部分は、学会・研究会・講演会などの活動で占められてきた。外科医の仕事、手術は「手仕事」で、体力（視力、柔軟な手の動き）・根気・忍耐力・協調性が要求される。生涯一外科医と格好よく言いたいのだが、メスを置く時期は確実にやってくる。幸か不幸か、丁度そうした時期は医療機関での己の期待される役向きがかなり変わってしまっていることに気づくのだ。私の場合は院長職であり、学会などの職務であった。

私などでも、関与している学会・研究会・講演会は数知れず多く、1年の予定と忙しさ加減はこれらの開催地・開催時期によって受動的に決まってしまう。こうして過ごしてきた過去10余年であったと回顧する。「聴く・しゃべる・書く」が主務になってきた昨今であり、いずれにも締め切りが厳然と存在して息の抜く暇のない時間を過ごしてきた。「しゃべる・書く」の内容は昨今の医療事情を反映して、高齢化問題・医療倫理・医療者と患者・家族の関係等々で、いずれも究極的に「ひとの生き方」に関連していて見解の可否が絶えず問われているのを肌に感じる。

誰もが程度の差こそあれ、考える問題・課題であるからである。さて、ANAからダイアモンド・カードが毎年送られてくるが、年間およそ50回飛行機に乗る生活は時に羨ましく思われるが自分自身は時ならず疎ましく感じている。忙しさを自分で調整できることを切望するのである。

全国行脚：とは言っても学会・講演会などで、全国各地をあちこちと旅行できる楽しみはあった。昨年、日本地図で学会・講演会などで訪れた都道府県を確かめて全国行脚を成し遂げたことを知って、よく飛び回ったものだと一種の感慨を覚えたのだった。

友人・知人を見送る淋しさ：歳と共に訃報に接することが多くなった。昔話のできるこれらの人々を失うことは、このうえなく淋しく慙愧に耐えない。特に自分より若くこれからの一層の雄飛が期待される人においては、その感を強くする。わが人生がホーム・ストレッチに差し掛かっていることを実感する瞬間でもある。

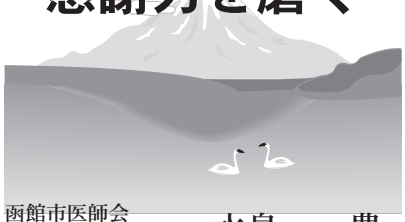
価値観:「残された時間をどのように過ごすか」を考える時期にある。これはその人その人の抱く価値観に影響されるものであろう。「価値観の多様化」と言われる時代に生きている私どもの選択肢は一つには絞り込めないが、果たしてそうであるのか。「そもそも価値観なるものが複数存在するのであれば、これらは価値あるものとは考え難い。ソクラテスの時代から価値観とは、人生を如何に生きるかにこそ存在する」と塩田七生氏は断言する。そのように言われると、問答は堂々巡りとならざるを得ない。やはり、自分で結論を出すしかないのである。「死の無意味性をいかに乗り越えるか」について、加藤周一・Mライシュ・RJフトン氏らは、1) 命が子や孫に引き継がれるという生物学的不死、2) 過去の業績への誇り、3)神とともに生きるという信仰に基づく神学的不死、4)家族・友人への愛による死苦の克服などを挙げている。自らのこととしてこの課題に立ち向かってみても、容易には結論に達し得ない。この命題を考えながら時を過ごすことにこそ、意味があるように思われる。深刻なこと、面倒なこと、結論の出にくいことなどを額に皺寄せて考え込むことなど人生の楽しみを損なうものだという考えもあろうが、患者の生死に長年関わって彼等のことに心を砕いてきた臨床医が自身のことを除外できないのではあるまいか。

喜怒哀楽に満ちた70年：平凡なわが人生ながら、誰しもがそうであるように、山あり谷ありであり喜怒哀楽に満ちている。他人（ひと）に支えられて乗り越えられてきた道行きであった。その時期・その時期に自分にとっての救世主が現れて、困難を何とか断ち切れたのだった。つくづくと、人間は他人（ひと）に依存せずには生きられないのだと思う。 この「依存」について、吉武輝子氏は「心はしっかり自立しながら、謙虚に柔らかく依存する」ことを説いているが、私も心掛けたいと思っている。“Count your blessings.”とする精神が、残された時間を謙虚に穏やかに楽しく満ち足りたものにしてくれるのであろう。

「喜」　「怒」　「哀」　「楽」

喜怒哀楽のわが人生70

感謝力を磨く



函館市医師会
共愛会病院　水島　豊

これまで官公立の病院にばかり勤務してきた私は、還暦をまじかにして何か新しい経験をしてみたいと思い、平成19年4月弘前大学から現在の民間病院に移った。副院長といっても名ばかり管理職でたいして責任のあるポストではないが、役職上、自然に病院の経営を考えるようになってきた。現在そしてこれからも、民間病院の経営環境は厳しいであろうと思われる。ますます病院の生き残りをかけた患者争奪戦に拍車がかかるであろう。会社経営は「社長力」「管理力」「現場力」が重要だといわれている。病院経営であれば、院長が指導力を発揮してどのように病院を導いていくのか、幹部職員は院長の方針をどのように組織全体に浸透させていくのか、そして現場の者は患者にどのようなサービスを提供していくのか、で淘汰が決まるとされる。

患者が来なければ病院は潰れるが、昨今は患者が来なくなって潰れるより、良き医療従事者、特に良き医師が集まらないために潰れることが多くなっている。つまり、病院が生き残るには、良き医師の集まる病院であらねばならない、と認識する必要がある。患者が集まる病院である前に医師が集まる病院であらねば病院の存続・発展がないのは理解できるが、ではどのような病院に良き医療人が集まるのであろうか？給料が高い、労働時間が短い、会議などの雑用が少ない、有給休暇が多い？これらは職員を大切にする、という意味では大切な条件である。酷使され、過労死するような病院に医療人が集まらないのは当然である。

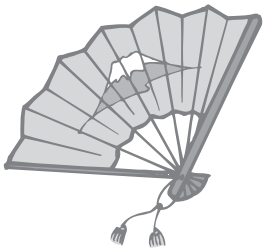
自分ならどのような病院で働きたいか？と自問してみると、ありふれた結論であるが「生きがいのある職場」ということになる。1日の大半を過ごす職場が生きがいを感じることのできない場であるならば、人生が無意味になってしまう、当然優秀な人材は集まって来ないであろう。では、医療従事者の生きがいとは何であろうか…？それは、患者から「ありがとう」と感謝されることではなかろうか？病院に限らずどのような職場であっても、ありがとうの言葉は働く者にとって大きな喜びとなる。ありがとうと感謝されることが職員の生きがいとなるなら、人は「10回ありがとう」と言われる病院より、「100回ありがとう」と言われる病院の方を選ぶであろう。職員の士気も、100回の病院の方が高いに決まっている。だとすれば、これから病院が生き残るためには、「沢山のありがとうの聞ける病院」を目指す必要があろう。

では、患者から「沢山のありがとうの聞ける病院」にするにはどうすればよいのであろう？「安心安全な医療を提供する」が病院の基本であるが、それに加えて患者に「感じの良い病院だ」と感じていただける病院であることが大事だと思う。「良い感じ」とは抽象的な表現で捉え難いものがある。最近のテレビのＣＭに「おもてなし」という言葉が出ているが、「良い感じ」は「良いおもてなし」から醸し出されるように思う。いずれにしても、良い感じを患者に与えるのは容易なことではない。

私は、職員の「感謝力」を高めることが一つの方法だと考える。患者に感謝されたいのなら、まず患者に感謝する心で接する、自分が相手から受けたいのなら、まず自分が相手にする、これは成功のための宇宙の原理である。病院職員が患者に感謝する心を持つことは大切である。病院は患者が来なければ1円の収益も得られない。利益が得られなければ自分達の給料は出ない。このように考えれば、患者に「当院を選んでくれてありがとう」の気持ちを持つことは当然と言える。職員が感謝の気持ちを持てば、自然にその気持ちが患者に伝わり、爽やかな雰囲気（＝良い感じ）が生まれるであろう。そして、患者はこれからもずーっとこの病院にお世話になろう、という気持ちになり、職員に「ありがとうございました」と言って帰るであろう。

「ありがとう」という言葉には不思議な力がある。ありがとうと言われて不愉快になる人はいない。ありがとうと言われて怒る人もいない。職場でも人間関係が良くなり、職員の働く意欲が高まり、それが現場力アップとなって患者へと伝わる。些細なことにも感謝の「ありがとう」を言って良い環境を創りだす、これが「感謝力」である。夫婦の間でも、親子の間でも、ありがとうはプラスに作用する。周囲の全ての人に感謝する自分が創れれば、人生がどれほど好転することであろう！

2009年は「感謝力を磨く」年にしたいと思っている。還暦を迎える歳になるというのに、今更このような幼稚なことを言っているようでは情けない、己の未熟さを恥じる次第である。ともあれ、新しい年も家族全員が健康で過ごせることを願っている。



丑年生まれでございます

札幌市医師会
札幌東和病院
池下　照彦

新年おめでとうございます。今回、道医報より年男、年女の中から無作為に選ばれたので、一筆のこととなりました。もとより文才の無い小生ですが、丑年生まれにちなんで小生の人生を反省（反芻）してみようと思います。

丑年生まれの人は、七転び八起きの努力で晩年安泰だそうです。丑は諸事不活発で中途で滞る傾向が多いが、粘り強く継続能力があるそうです。若い頃は目立たないが、良い友人や指導者に恵まれて努力することにより開花し、慎重に人生を送ることができるんだそうです（東洋運勢学会より）。

さて、小生は十勝新得の生まれです。警察官だった父が千島のクナシリ（北方四島の1つ）の駐在所勤務のころ太平洋戦争が始まりました。駐在所の部屋に大きな箱に流し込んだような羊羹の隅の方に砂糖のにじみ出たかたまりがいかにも甘そうに見えました。羊羹の木箱はいくつも積まれていて、これは兵隊さんの食べものだと母に教えられました。羊羹はチョコレートと同じくカロリーの多い携行食なのですね。小さな小生が駐在所の在る坂の上から海を見おろすと、一隻の軍艦が真横に見えました。黒い色で立派に見えました。その軍艦はやがて真珠湾へと向かって行ったのです。その後、父も出征しました。母と姉と弟と父方の祖父母のもとへ移り住みました。祖父は屯田兵で狭い田畑で生計を立てるいわゆる「水呑み百姓」でした。戦時中は誰でもそうだったと思いますが、食べるだけで精一杯で、小生も野原に出かけてわらびやふき、よもぎを採ってくるお手伝いをしたり、石炭を燃やすための焚きつけ（がんびの皮など）を集めたりしました。要するに雑草の育ちであります。函館本線の線路わきでSLのけむりと蒸気にまみれながら、田んぼで働く母の姿を暗くなるまで見て育ちました。

それから命からがら復員した父は警察官として道内各地を転勤しましたので、小生も小学校を3回、中学校を3回、高校を3回転校し、いろんな同級生を距離をおいて観察しながら勉強することになりました。何か変ですが友達をつくる時間がなかったというか、父が警察官ということで多少敬遠されたのかも知れません（先生達からも？）。素直ではない子供だったのでしょうか。暗かったのでしょうか。母は大好きでしたが、父はあまりにも厳しすぎるように思いました。

12歳のときは戦後も少し落ちついており、簡単な道具で草野球を楽しんで成長し、マラソンの選手だったりで健康優良児に選ばれました。当時は函館の小学校の生徒で、同級生の「今」君が仲良しでしたが、少しのろまで体格は良いのにスポーツ音痴で、函館の穴澗（？）という岩場の多い海で海水浴中に溺れ、海の底の岩の間で死んでいるのを発見しました。ショックが強く余り悲しまなかったような気がします。今でもボーとした「今」君を鮮明に記憶しています。

中学3年のころも野球をやっており、当時は旭川の中学校の一塁手で四番バッターでしたが、学校の先生から「不良少年」と思われていたようです（勉強せず、女生徒と仲よく会話していたからかな）。

その後不良少年は反省しまして野球をあきらめて受験勉強に専念し、北大の医学進学課程へ入学しました。親からの仕送りは必要最小限でしたので家庭教師やら、電通のアンケート取りやら、はては野菜売りのリヤカー押しをして、真夏の直射日光を受けながら早朝から夕方まで売り歩きました。少額のバイト料を貰って大変だと思いながらも今では懐かしい思い出です。

24歳は医師になる直前と結婚間近の年令でした。当時の医師国試は普通に勉強していれば受かりました。結婚は逆算で25歳と決めていました。25歳で子供を生めば、50歳で子供は25歳で医師になるはずでした。当ては子供3人ともはずれて別の仕事をしております。医師としての親の仕事が余りハードだと思ったせいかどうかは知りません。何しろ地方へ出張した時は多忙で食事も睡眠も全く不足で不規則でしたから（当時は皆さんそうですよね）。

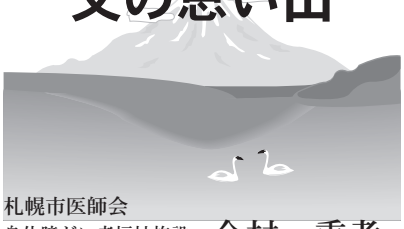
36歳は札幌の老人病院へある縁があって勤務（やとわれ院長として）しました。このころはボウリングを趣味としていまして、300点ゲーム（公認）も達成しました。しかし同時に義兄の脈をとる不幸に見舞われました（呼吸器疾患でした。貧乏学生時代に大変お世話になった義兄でした）。また、その病院で子供のころ可愛がってくれた祖母を看取りました。

48歳は石川達三の「四十八歳の抵抗」をまねて現在の開業に至りました（40歳代のささやかな可能性を信じて）。老人医療を選んだのは、祖父母の影響が大きいと思います。

60歳はケアマネージャーに合格しました（第1回目）。この資格は必要ないと思いましたが、介護保険制度理解のために勉強しました。

今は人生の第4コーナーを回ったと思い知らされ愕然としておりますが、ゴールまではなんとか精一杯頑張って人生を完走したいものだと思うのでございます。

父の思い出



札幌市医師会
身体障がい者福祉施設
ぴあとぴあ17
今村　重孝

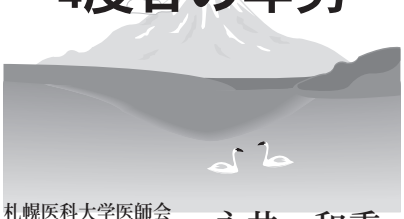
私は今年が6回目の干支で、72歳となり、父は78歳で亡くなったので、この世に生を享けた期間ではまだ負けている。しかも父は48歳のとき脳溢血にかかり、30余年闘病生活を送っての現世なのだからそれを勘案して、そのうえ現代医療の応援を受けた小生は、もっと負けていると思う。立教大学を卒業した父は26歳で故郷旭川に戻って来て家業を継ぎ母と結婚した。母以外の女性を知らないと言いつつ、3男3女をこの世に送り出したが、母もこの言葉を信じていた夫婦仲のよさ。また負けた。

もう一つ負けているものがある。自著の出版である。「船出」という訳詩集を闘病中に出した父は、贈呈する人に「香典代わり」といいながら、私を負かした。医学論文ならソコソコあり、海外の学会での発表もある私なのに独自の著書出版はまだなく、父に負けている。数年前から、「札医通信」の成績発表を兼ねたコラム欄に、雑文を載せてもらい腕の衰えを防いでいるが、勝ち目はなさそうである。

唯一勝ち目がありそうなのは囲碁である。父が、脳溢血で倒れる前に「厚かましい奴だ」といいながら白石の侵略に苦慮していたのを記憶している。発病してからは碁石を持とうとせず、親子対局は果たしていないが、多分1-2級の棋力と思う。大模様を張っても競り合いに弱い棋風は、そっくり受け継いだ。幽明境でさあ一盤といこう。とはいっても碁にかけた時間と費用を考えれば、勝ったと言えるほどのものではないかもしれない。

17歳のある日、学校帰りにわが家に着くと、父は脳溢血で倒れて絶対安静だとの知らせ、受験生だった小生に医家を目指させる天の声である。そのわりに内科ではなく小児科の医局に入り、マージャン、囲碁にふける修行生活、それでも障害児の医師を40年近く勤め上げた。大病で何度もメスの入った鍛えの足りない肉体、最後のラウンドは女房を立合い人に長生きの勝負、あと7回新春を祝えたら小生の勝ちと判定しましょう。よろしくお願いします。

4度目の年男



札幌医科大学医師会
札幌医大医学部小児科
永井　和重

今年4度目の年男を迎えることとなった。しかしそれまでの年男と今回とでは何かが明らかに違う。過去3回の年男は常に「右肩上がり」であった。2度目は医学部の最終学年に当たり自分の進路を決めた年であり、3度目は留学から帰国して結婚した年だった。その後の12年間に4人の娘が生まれ、人並みに家も新築した。さて今後もさらなる発展をと望みたいところだが、どうもこれまでのようにはいかない現実を目の当たりにしている。実は40歳を過ぎた頃からこの徴候は現れていた。何が一番衰えてきたかというと（視力の衰えは別として）、一言でいうなら持久力だ。すなわち「頑張り」が利かなくなった。40歳を過ぎて、しゃにむに頑張ると後で手痛いしっぺ返しを食らうことを何度か経験しているうちに、これは今までとは違うぞと自覚するようになった。

これは中年であれば誰しも経験することで、「4度目の年男／年女」の共通の悩みかもしれない。しかし一方で、これは生理的な事柄でもあり、悩むどころか背伸びせずに年相応に生活すれば良いという考え方もできる。幸いいろいろな物事に対する興味は衰えるどころか、日々新たに湧いてきて尽きることがない。仕事の上では「感染と免疫」が自分の研究テーマだが、やるべきことややりたいことは山程ある。これまでの経験から何をどのように進めたら良いか、大体の目途は立っている。だから後はひたすらやるだけであるが、これが中々容易ではない。時間や人手が余りに足りない。海外（カナダ）に留学中カナダ人の同僚が、別に四六時中実験ばかり行っている訳でなく、プライベートの時間はしっかりと確保し、優雅に暮らしつつそれでいて一流雑誌に論文を載せているのを羨ましく眺めたことがある。彼らの中に悲壮な顔付きで実験している者はいなかった。がむしゃらに研究することが困難になってきた今、留学中に見た彼らの余裕、研究・仕事も人生の一部として楽しむ余裕が求められているのではないかと思う。

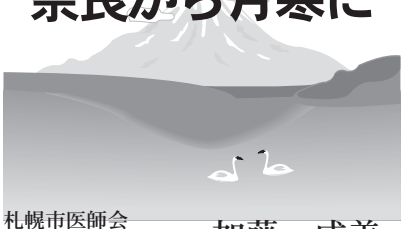
年男も4度目になると、自分にできることとできないことの区別がつくようになった。まだ5度目や6度目の諸兄ほどではないにして

ラオスで国際医療協力研究を行う筆者とラオス人医学生達

も、自分の未来の限界が少しずつ見えてくる。だからもはや無限の可能性を追い求めるのではなく、「有限な可能性」の中でいかに効率良く「自分の目指すもの＝夢」を実現していくかが課題となる。IT化のおかげで仕事は24時間どこにいても可能となった。しかしヒトの体はそう容易に進化を遂げるほど単純ではない。ヒトは24時間戦うことは不可能であり、必ず休息と癒しが必要となる。自分にとっての癒しは、家族と過ごす時間は言わずもがなだが、音楽では学生時代に取り憑かれたリヒャルト・ワーグナー、書物では最近中国の老荘思想と漢詩が生活の潤滑剤となっている。例えば「荘子」などは疲れた頭をほぐすのに最適な書物である。西洋思想も高校時代から「これは生きている限りいつか究めなくてはならない問題」と思っているが、内容が非常にロジカルなので、普段仕事でロジカルな思考ばかりしていると、プライベートでは何といっても非ロジカルな環境に浸りたくなる。

中年になりいろいろな体調の変化を経験すると今までにない「焦り」を感じるものだが、焦ったところで事態が好転する訳でもない。揺れ動く十代の思春期は成人に到達する関門であったが、人生を一通り経験しもう安定だと思っていた中年期は、実は再び揺れ動く「思秋期」でもあった。この「思秋期」をいかに十分味わい尽くすかが、次の年男までに与えられた課題であろう。

奈良から月寒に



札幌市医師会
かとう眼科クリニック　加藤　成美

新年、明けましておめでとうございます。

平成18年9月、札幌市豊平区月寒中央に眼科クリニックを開院して、あっという間に2年が過ぎました。おかげさまで、今では2年といわず長くこの地に生活しているように、落ち着いて仕事をさせていただいています。

私は、生まれは奈良県奈良市で高校まで過ごしました。実家は、東大寺大仏殿より徒歩10分にあり、小学校時代は奈良公園が通学路の一部でした。バス停でバスを待っていると鹿が横を通り、写生大会の画材は奈良の神社と自然でした。あまりにも身近に歴史・遺跡があり、生活の一部になっていたので奈良にいたときにはわざわざ歴史を感じることがありませんでした。離れてみて、その歴史をゆっくり感じるようになりました。参道を歩くと、神聖な場所に足を運ぶ緊張を覚え、大仏様を前にするとその大きさに今更ながら感動して身が引き締まります。

大仏殿を支える柱の中に、穴の開いた1本があります。一説によると、大仏様の鼻の穴の大きさと同じだと言われているこの穴は、くぐることで目から鼻に抜けるということとなり、機転の利く子になる…賢い子に育つと言われています。また、この柱が大仏殿の鬼門の方角に位置することから、この穴で悪い気を抜いているという説もあり、厄除けになるとも言われています。子供の頃はうれしくてくぐっていましたが、今は、もし途中でひっかかったらと考えると恥ずかしくて挑戦できません。

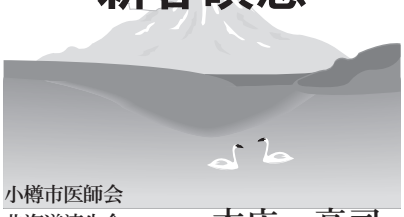
2010年は、日本で初めての大規模な首都「平城京」が奈良に誕生して1300年となる記念すべき年です。平城京跡には、朱雀門が復元整備され、平城京の中核をなす第一次大極殿正殿の復元工事も着手されています。いろいろなイベントも考えられていてにぎやかになるでしょう。もし機会がありましたら、ぜひ奈良を訪ねてみてください。

大学を卒業後、札幌にやってきました。そして2年前、今までの経験を生かして地域に密着した医療をやりたくて、札幌市豊平区月寒にクリニックを開院しました。月寒のことを深く知りませんでしたので、土曜日の午後、診療後に月寒周辺を散策することにしました。アンパン道路？この石碑は？月寒資料館の方に教えていただきました。

安政4（1857）年、銭函から千歳に至る札幌越新道の開削が始まり、豊平川の右岸に渡し守が住むようになったのが豊平区の始まり。明治時代になり、本州から多くの移民が入植、平岸村、月寒村、豊平村が誕生。三つの村は合併し豊平村となり、その後、豊平町に昇格。町役場が豊平から月寒に移転したことにより、平岸の人たちが役場のある月寒へ直接行けるように新しい道路の開削が行われた。この道路は起伏が激しいことと水田を埋め立てなければならないなどから、とても大変な工事だったので、当時月寒にあった軍隊の応援によって工事が進められ、兵士には毎日「アンパン」5個が配給された。このことから、この道路を「アンパン道路」と呼ぶようになったということです。

先代の方々の苦労を考えると、私などまだまだですが、ゆっくり、じっくり歩みたいと思います。これからもよろしくお願いいたします。

新春瞑想



小樽市医師会
北海道済生会
西小樽病院
本庄　高司

私は、小樽の重症心身障害者施設に勤務しています。今年、還暦を迎えることとなりました。原稿要請があり、思いつくまま書いてみました。「一握の砂」「悲しき玩具」から石川啄木の短歌を引用させてもらいました。歌は本来縦書きとすべきですが、誌面の都合上横書きとなったことをご容赦ください。

かなしきは小樽の町よ
歌うことなき人人の
声の荒さよ

1907（明治40）年の9月から3カ月間、啄木は小樽日報という新聞社の記者をしています。21歳の頃です。日露戦争勝利後、北海道の港町として栄えつつあった当時の小樽は、男達の声も荒々しく活気に満ちたものだったようです。秋の小樽港の埠頭では釣りをしている市民が見受けられます。家族連れも多く、そののどかな雰囲気とこの歌の持つイメージが一致せず少々戸惑うところです。時代の違いなのかもしれません。

しらしらと氷かがやき
千鳥なく
釧路の海の冬の月かな

1908年1月、啄木は釧路新聞社に勤務します。4月には東京に出て作家として活動しますが、お金にはかなり困り、友人の金田一京助の援助を受けます。それとは全く関係ないことですが、私は学生時代に研修で釧路市立病院にお世話になりました。痩せた腸回転異常のお子さんが入院していたことを覚えています。3月でしたが、月が出ていたかどうかは全く記憶にありません。

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

啄木は、小樽に来る前は函館で代用教員をしていました。片思いの女性がいたそうです。余計なことですが、青柳町ではなく日吉町に私が通っていた高校があります。坂を下った湯川が市電の終点となっており、休日にはその電車に乗って街へ映画を観にいきました。当時、植木等主演の「日本一の無責任男」などの無責任シリーズが流行っていました。不思議だったのは、植木等演ずる会社の若手社員は「会社人間」というほど仕事にのめり込むことはなかったとしても、適度な責任感を持ち余裕しゃくしゃくの態度で問題を解決していたことでした。「無責任」では全くなかったということです。最近、「自己責任」という言葉をよく耳にします。しかし、そうおっしゃる方々がいざ自分の番になると責任をとらずに人の懐をあてにするのはいかがなものかと思います。

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

上京する人々を乗せた列車の終着駅としての上野駅ホームはなくなりました。この短歌と井沢八郎の「ああ上野駅」の歌と集団就職で上京する「金の卵」の映像（ＮＨＫのドキュメンタリー番組）が重なり、胸が熱くなります。“などさ”“わ　湯さ”で通じる津軽弁は世界一短い言語ではないでしょうか。

はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ぢっと手を見る

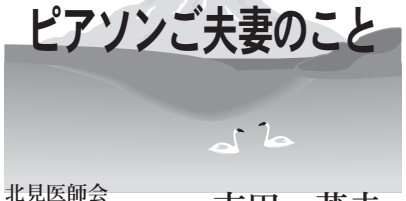
私の母校の中学校の卒業文集に「勉強せど勉強せどなおわが成績上がらず　じっと手を見る」というのがありました。それを作った男子生徒は、成績はトップクラスではなかったと記憶していますが、知性はトップクラスだったと今になって思います。貧困と格差が社会問題になっています。医療器具としてのディスポ製品は有用ですが、人間のディスポ化はあってはならないと思うのです。

脈をとる看護婦の手の
あたたかき日あり
つめたく堅き日もあり

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

1912（明治45）年、啄木は肺結核のため東京で亡くなりました。26歳でした。どうでもいいことですが、私は今年60歳になります。もう少し頑張ってみたいと思っています。え、何、「お呼びでない」ですって。こりゃまた、失礼いたしました。

北見での初めての新年とピアソンご夫妻のこと



北見医師会
北見赤十字病院
吉田　茂夫

昨年札幌のわが家で正月を過ごしていた時には、私と家族の考えの中に、翌年に北見で新年を迎えるとは夢にも思っていませんでした。そして今、北見での初めての新年を迎え、北見の住民として何かを書こうとしていることに不思議さを感じています。思い起こすと昨年の3月31日、正に私と家族にとって晴天の霹靂で北見赤十字病院に就職することとなり、赴任のため札幌から車で遠軽近くまで来たところ、季節外れの猛吹雪となり「北見での将来を暗示する悪天候か」と思いつつ、ようやくの思いで北見市内に入ったと思ったら、公宅までの道に迷ってしまったことを懐かしく思い出します。

北見赤十字病院の内科医師大量退職問題は、ＮＨＫの全国放送や他のマスコミでも大きく報道されていたようで、着任して間もなく記者会見が開かれ、大勢の記者から「どのような経緯で火中の栗を

拾ったのか？」「北見には支援してくれるゆかりの人がいるのか？」「北海道庁から派遣されたのか？」等、北見に来た理由を何度か聞かれ、答えに窮し、自分自身で来た理由を改めて考えることになってしまいました。私事になりますが、北見に赴任する前に母の看病が続いていたことと、赴任直前に母の葬儀が重なったため、北見や北見赤十字病院について調べる時間もない中での赴任でしたので、じっくりと考える時間がなかったことも事実でした。しかし聖書に出てくるアブラハムのカナンへの導きのような、他者による人生の選択も良いと思っておりましたので、家内の「行きましょう」の言葉で納得となりました。

着任間もなく道内新聞の地元版で紹介囲み記事を載せたいとのことで、記者さんとの話の中で、たまたまピアソンさんや北光社と言う開拓団の話となり、「ピアソン館近くに住む、クリスチャン夫妻の院長」として紹介されました。赴任直後で北見市や病院の関係者の名前はまったくといってよいほど知らない状況で、雑談の中から百年も前に北見に住んでいたピアソン夫妻の名前が出て、われわれの紹介記事に載ったのは本当に不思議な感じがしました。私自身はピアソン宣教師と言う方が、昔北見にいたということは何かの機会に聞き、わずかばかりの知識しかありませんでした。この囲み記事により私はピアソン夫妻が随分と身近になったように思います。

ジョージ・ペック・ピアソンさんは、北海道の開拓時代に、アメリカのプリストン神学校を卒業し、将来を嘱望されていた青年だったようですが、本人の強い希望で来日。北海道では北星女学校や札幌農学校で教師をしつつ、宣教師として献身的に働き、その後函館、小樽等を経て、北見の夕陽に感動して現在記念館の建っている場所に居を構え宣教活動や聖書の日本語翻訳（略注　新旧約全書）を行い、そしてピアソンさんご夫妻の真骨頂であります、自宅を解放しての住民との交流や隣人愛に基づいた諸活動を行っております。また、なかなかユーモアのあった人のようです。

私はピアソンさんの考え・行動を考えることで私自身の問題を整理しようと「ピアソンさんは何を思ってこの土地に来たのだろうか？　どうして神様はこの地に彼を使わされたのだろうか？」などと、土曜日の午後、あるいは札幌から友人知人が来た折に、ピアソン館に立ち寄って、百年前にこの地で、何を考えていたのかを思い巡らしておりました。

ピアソンさんは、写真や紹介文などによりますと、背の高い、大変愛情深い善意の人であったようです。当時いろいろと困難なことがあっても、その苦労を苦労ともせず働き、弱者や寄留者などの方に対して人を差別することなく遇し、ユーモアと生活の工夫で明るく楽しく自分が信ずる道に従って生活をしていたようです。また一方アイーダ夫人は、廃娼運動に奔走するなかで暴漢に襲われ、怪我をしてもくじけず、その運動に勝利を収めるなど、相当な困難にもへこたれない、たくましいご夫妻であったようです。このようなご夫妻に対して北見の方々は、拒絶反応も含めていろいろな反応をしたようですが、今では「ピアソン通り、ピアソンホテル、ピアソンアパート、ピアソン何々等」地域の多くの建物や道路にピアソンの名前をつけ、誇りとしているようです。加えてボランテアＮＰＯ組織であるピアソン会の方々の献身的な奉仕を通しても、現在の北見の方はピアソン夫妻を北見の文化発展に尽くした方として、敬愛していることを感じ取ることができます。

昨今の医療を取り巻く環境は、国の福祉医療費の削減方針以来、先の見えない状況であります。特に当院のように地域の公的病院で、産科や小児医療、救急、災害医療などの行政医療分野を担っている病院は経営的にも大変苦しんでいるのが現状であります。加えて病院管理者は、医師、看護師や他のパラメディカルの確保についても大変な苦労を重ねていることと思います。しかし、この北海道はピアソン夫妻のような金銭や名誉を望まずに無私で地域住民に奉仕された方々が百年余り前から、地域に入り、特にピアソンご夫妻は野付牛（今の北見市）という開発半ばの地で、一部住民の無理解と理由のない山師呼ばわりやスパイ容疑、寒さ、貧困、非難、そして殴打をされながらも、地域の方々と一緒に、自己の姿勢を崩すことなく生きられ戦ってこられた地であります。私自身が現実的な対応に追われてしまうことも多々ある中、そんな時こそご夫妻の心意気と清々しさを思い起こし、無私になれるように努め、少しでも将来のこの地域の医療を良くするために働こうと励まされております。また、最近は、今までの私の臨床、行政、教育という雑多な経験が、北見の地で生かされていることに気づき、逆に今までの経験は、北見に来るための準備期間であったように思わされています。いずれにしましても、北見での新しい年が有意義な年となるように願っております。

結びになりますが、新しい年が北見市民や北海道道民そして皆さんにとって良い年でありますことを祈念するとともに、北見に来る機会がありましたら、駅から歩いて15分ほどの北海道遺産「ピアソン館」を訪ね、ピアソンご夫妻の人間性に触れることをお勧めいたします。また、ホームページ（www.npo-pierson.org/）も参考にしてみてください。

函館に至るまでを振り返って

函館市医師会
高橋病院　石川　聡

会員の皆様、あけましておめでとうございます。

丑年（昭和36年生まれ）の石川聡と申します。現在函館の高橋病院にリハビリテーション医として勤めています。今年が年男だなんて、この原稿依頼をいただくまで気づきませんでした。気持ちは青年でも肉体が追いつかないギャップは、50歳を前にしたわれわれ世代共通のものでしょうか。

さて、小生、北海道はまだ3年しか住んでいなく道産子見習いといったところですが、函館は大好きです。居酒屋での新鮮な海の幸、駒ヶ岳を眼下にスキー（ボーゲン）、プロのレッスンを受けてのゴルフ（ビギナー）、農家の指導を受けての野菜作り（ど素人）、どれも単身赴任による寂しさを埋めあわせるのに十分な娯楽です。今度は三味線を習いたいと妄想しています。ニューヨークに赴任ならジャズでしょうが、津軽、松前エリアならやっぱり三味線です。

今回は小生の医者歴20周年を記念して（？）誌面をお借りしてこれまでを振り返ることをお許し願いたいと思います。

＜北海道に至る経緯＞

生まれは東京、高校までは上州（群馬県）で育ちました。出身大学は浜松医科大学です。初めは南アジアかアフリカでハンセン病の医療に携わろうと思い、ハンセン病施設を有する岡山大学整形外科学教室の門を叩きました。当時の岡山大学は、他大学出身の入局者の場合、母校の整形外科教授の推薦状を提出する必要がありました。卒業間近、推薦状をお願いしようと母校の井上哲郎教授の研究室にお邪魔したとき、「うーん、卒業試験も通らないやつを推薦するのか。まあ、しょうがない。誉め殺しておくか」と毛筆で過分な内容の推薦状を岡山大学の田邊剛造教授宛に書いていただきました。結局岡山大学には整形外科専門医、学位をいただくまでお世話になり、最後の2年間は小生の希望で理学療法部（リハビリ部門）に配属してもらいました。リハビリは手先の不器用な小生には整形外科より向いているようでした。

平成20年12月19日に函館市医師会、函館整形外科会共催で講演された岡山大学の尾崎敏文教授は教室の2年先輩にあたります。研修医時代はアフター11（尾崎教授は若い頃から11時までは仕事をされていました）にお酒をよくお誘いいただきました。酒を愛する気持ちは互角でも学問に対する情熱・体力は雲泥の差でしたが。この岡山時代、各関連病院をローテートする傍ら、ずっとハンセン病施設に非常勤で通うことができる寛大な配慮をいただきました。ハンセン病の患者さんに関わりながらわかったことは、高齢化した彼らの医者に対する要望は、ハンセン病そのものではなく一般疾患の治療でした。整形に関しても普通の腰痛、膝痛で困っている方が大半でした。ハンセン病そのものは偉大な諸先輩のご尽力でほぼ完治できる状態でした。それ以来老年学を学ぶ必要性を痛感していました。

その後、縁があって神戸に移り兵庫医科大学リハビリテーション科に属しながらリハビリ指導医を取得しました。このとき派遣された180床の病院で、リハビリ科の立ち上げを経験し、中規模病院が一番自分の能力を発揮できる場だと確信ました。しかし、この間に、どうしても老年医学を学びたいという気持ちを断ちがたく1年間フランス政府給費留学生としてパリ郊外の1,600床を有する内科系老年専門病院で研修を許されました。医師も患者も死を自然なものとして受け入れ、病院は死に至るソフトランディングの場と捉えていることが強烈な印象でした。

＜高橋病院赴任＞

このフランス留学の時ご尽力いただいたのが函館の特養施設「旭ヶ岡の家」施設長グロード神父でした。その縁で、彼の近くで働いてみたいと思い、前任病院のリハビリが軌道に乗ったのを機に、3年前に函館に赴任して現在に至っています。赴任当初は高橋病院は小さなリハビリ室と数人のセラピストがいる程度で、リハビリ部門としてはまさにゼロからのスタートでした。立ち上げ屋（？）の血が騒ぎました。その後、順次、長谷川院長や在宅診療の経験豊かな岡和田先生、呼吸器の斉藤先生等、心強い同士が赴任され、訓練室の拡充、セラピストの増員、回復期リハビリ病棟の立ち上げ、リハビリテーション専門医研修指定病院の認定、心臓リハビリテーションⅠの取得、地域の他病院との連携等々、職員一丸となって、ひたすら走り続けて今日に至りました。

各急性期病院に毎週定期的に赴きface to faceの関係構築を努力した結果、先方の先生方にも信頼していただき、当院へのリハビリ患者紹介も順調に増えていきました。函館市立病院整形外科や函館中央病院整形外科に至っては、毎週当院へ医師が紹介患者のフォローに来ていただくという全国的にもあまり類を見ない画期的関係に発展しています（自画自賛）。さらに回復期病院同士の連携も強固となり、医療において函館のsafety net構築はできつつあるような気がします。官・民や医局の垣根を越えて医師が協力し合うことは、関西ではあり得なかったような気がします。さらに院内に長谷川院長を班長に岡和田、斉藤、石川の4人の医者でベッド運営班を立ち上げ、1日2回頭をつきあわせベッド調整をしています。このことが実り、今では急性期病院からの患者紹介に対し、問い合わせから1週間程度でベッドを用意で

きるまでになりました。今後は、開業の先生方とも連携を取り、街全体にきめ細かな医療の安全網を張り巡らし、どなたでも安全、平等な医療を受けられるよう微力ながら函館市民として努力していきたいと夢を膨らませています。是非会員の皆様のご助言、ご協力を仰ぎたいと願っております。

当初海外医療を志しながら何故か北海道にいますが、こちらの医者不足の現状を目の当たりにし、今では海外でなく日本の医療を何とかしなければと熱くなっています。肉体は衰えても心は燃えている年男です。

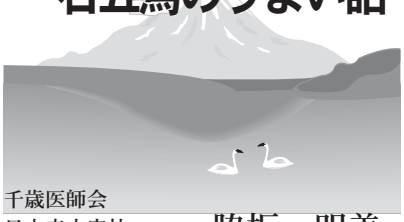
＜医師不足＞

最後に医療崩壊、医師不足が叫ばれて久しい昨今ですが、研修の在り方に関しては、一定の実力に至るまでは研修指定病院を合計15年勤務することを義務付け、それをクリアーすれば公立、民間に関係なく給料の高水準を約束される、その際、研修期間に僻地医療の選択を義務付けたらどうか、というのが小生の個人的見解です。さらに僻地研修を増やせば研修期間を短縮できる等のオプションをつけられないかと。

以上長々と戯言にお付き合いいただきありがとうございます。

今年も会員の皆様に幸多かれとお祈り申し上げております。

一石五鳥のうまい話



千歳医師会
日本赤十字社
血漿分画センター
脇坂　明美

人間には無限の空間が広がっているように思いますが、われわれが住めるのはせいぜい標高5,000ｍまで、直径1mの地球儀にするとわずかに0.4mmです。ここから離れては住む世界とて無い人間が、大気を汚染し、排ガスをプンプン撒き散らしています。その結果が地球温暖化をはじめとするさまざまな地球異変に繋がっています。われわれ人類は有限な資源を過剰に消費することで、経済を拡大させ、繁栄を築いてきました。しかしそれは持続不能な繁栄で、将来破綻することは明らかです。われわれは今「持続可能な経済社会」への転換を迫られています。私もこれに気づき、省エネの一環として5年前より自転車通勤を始めました。毎年2,000km走破し、もう1万ｋｍ、地球4分の1周を走ったことになります。

自転車通勤は、省エネ以外にも、CO_2削減、体力の増進、四季の移り変わりを楽しめていつも気分が爽快でいられる、と一石四鳥の効果があります。今、うつが大流行。しかも大人ばかりではなく、子供にまで広がっています。うつは脳内のセロトニン不足が原因です。東邦大学有田秀穂教授によるとセロトニンが少ないと、心の平静さや姿勢を保つことができないと言います。今の若者は急にキレたり、すぐに地べたに座りたがるのもセロトニン不足のせいとのこと。有田教授はセロトニンの分泌を亢進させるには、朝の眩しい陽光を浴び、軽い負荷がかかるリズム運動を疲れない程度にするのが良いと述べています。私の自転車通勤は30分、仕事場に到着する直前に長い緩やかな坂道があり、正にこれらの条件にぴったりです。いつも気分が爽快なのは単に自然豊な中を走るためではなく、セロトニンが分泌されているからかもしれないとも思っています。

さらに私の場合は冬、自転車に乗れないことが、五鳥目の思わぬ効果をもたらしました。

雪が積もり車通勤を始めると、急な運動不足のせいかどうも体調が優れない。そこで手短かに毎日できる運動はないかと、あれこれ考えあぐねて歩くスキーを見つけました。私の住む千歳は非常に自然に恵まれたところで、家のすぐ側には支笏湖から続く清流千歳川が流れています。ここに自分でコースを作り、毎朝出勤前に寒さの中を30分間スキーで歩くと体調はすこぶる良くなりました。また、週末に市内の公園に設置されたクロスカントリースキーのコースへ出かけました。ここを歩いていると、後ろから来てあっという間に私を抜いていく。これが次から次へ続くと、さすがに楽しい気分も萎えていきます。彼らを見ると皆スケーティング走法です。早速スポーツ店に行き、スケーティング用スキーとブーツを購入し、見様見真似でクロスカントリースキーを始めました。初めは5kmを走ると満足でしたが、だんだん距離も伸びスピードも見違えるほど早くなりました。次いで各地で開かれるスキー大会に出場して楽しむようになりました。大会では思わぬ人と会う喜びがあります。またクロスカントリースキーではテクニックの向上でこの年になっても記録が良くなるのも嬉しい限りです。さあ皆さんも自転車通勤を始めませんか？環境に優しいばかりでなく、思わぬ効果があるかもしれませんよ。

温かな笑顔
Smiling Face

札幌市医師会
北祐会神経内科病院　濱田　啓子

時が経つのはなんと早いものだろう。気が付けば私も今年で還暦を迎えることとなった。この60年間で自分なりの経験を積み、いろいろな国にも行った。夫の転勤で2年間暮らしたアメリカ、友人と最後の別れになってしまったインド旅行、学会で訪れたアフリカやオーストラリア。どの国の思い出も大切な私の一部となっている。そんな記憶の中で一番私の心をゆさぶり、温かく照らしてくれたのは煌びやかな観光名所でも異国情緒あふれる文化でもなく出会ってきた人たちの笑顔だ。

アメリカ滞在当時、長男はいたずら盛りの幼稚園児、まだ幼い長女と二男の三人の子供の面倒を見ながら言葉や文化の壁と戦うのは大変なことだった。そんな生活の中で「おばさん！なに困っているの？」と声をかけてくれたさまざまな人種の子供たちの笑顔には本当に救われた気がする。

そこで出会ったのが長女と同い年のフランチェスカとその母のビクトリアだった。両親が大学のボランティアの仕事でエジプトに滞在中に生まれたフランチェスカは環境が厳しかったせいか生まれついて可愛らしい顔の片側にマヒがあった。ある日、フランチェスカと遊んでいた長男がビクトリアに「おばさん、フランチェスカの片方のお耳はなんで小さいの？」と質問した。私は思わず息をのんだが、ビクトリアはやさしい声で「フランチェスカはとっても、とっても可愛いので神様が一つのお耳で十分と思ってしまって持っていってしまったの」と答えてにっこりとほほ笑んだ。その時のフランチェスカのパッチリとした目と無垢な笑顔、母としてフランチェスカを愛するビクトリアの優しいまなざしは今も私の心に鮮明に焼き付いている。彼女は文学を志し、スタンフォード大学に進学したが残念なことに在学中、心臓の病で急に天に召されてしまった。記憶の中の彼女の笑顔は今も私を勇気づけ、消えることはない。

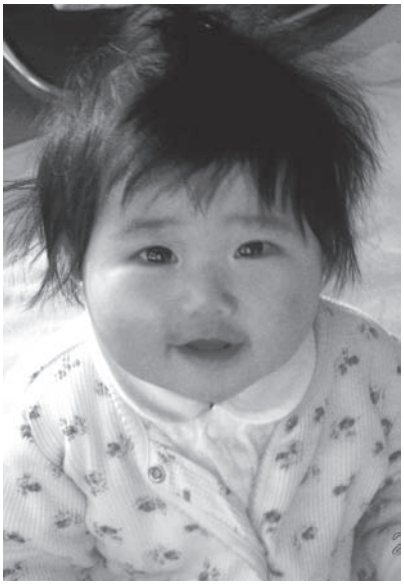
もう見られなくなってしまった笑顔という点で共通しているのはインドの友人ムッティの包み込むような優しさと威厳に満ちた笑顔だ。ムッティは留学生として北海道大学を訪れ、インドに帰国してから心臓病で亡くなる直前まで大学教授として後進の指導に努めた誠実な人物だった。彼とわが家とは北大留学中からの付き合いになるが、私や三男が各々インドへ旅行した時も昔と同じく家族の一員のように迎えてくれた。インド旅行時、三男は大学2年生になり社会との関わりを現実的に考えていかなければならない時期に入っていた。どのように他者と接すればいいか悩んでいた三男にムッティは「人はそれぞれ波長を持っている。君も持っているし私も持っている。波長は共鳴しあいながら変化していく。周りの人が付き合いにくいと感じるなら、君自身が付き合いにくい波長を出していることにも気付かなければならない。君も私も良い波長をだして共鳴したいね」と言ったのだという。このエピソードを聞いた時、私は彼がいつも浮かべていた笑顔の真のやさしさや強さの理由が分かった気がした。

見られなくなってしまった笑顔がある一方、守らなければならない笑顔もある。それは子供たちの笑顔だ。アフリカやオーストラリアなど多くの国で貧困や病をかかえた子供たちに出会う機会があった。そんな彼らの笑顔に共通して感じられることはそのまなざしに希望が満ち満ちていることだった。子供特有の生命力なのだろうか、私よりもずっと小さな体の中には私よりもずっと大きな生きる喜びが詰まっているように感じられた。ふと、新聞に目をやれば終わりのないマネーゲームや痛ましい犯罪などの記事が紙面を飾っている。私の出会った子供たちは、その希望に満ちた笑顔を曇らせることなく成長していくことができるのだろうか。

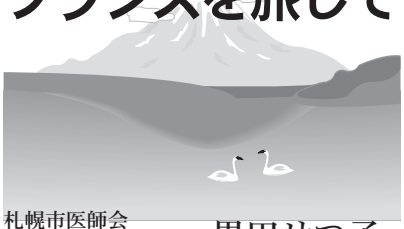
人はそれぞれに笑顔を持っている。フランチェスカやビクトリアのような愛情の笑顔、ムッティのような威厳に満ちた優しい笑顔、アフリカやオーストラリアで出会った子供たちの希望に満ちた笑顔、どんな笑顔もそれが心からの笑顔ならば誰かを幸せにできるエネルギーを持っていると私は思う。

私事だが去年、私も「おばあちゃん」と呼ばれる立場になった。私はこの小さな笑顔を守るため大きな笑顔で包んであげたいと思っている。それは私だけの笑顔ではなく、周りの一人一人へ広がる大きな大きな笑顔の輪であってほしい。

今はつめたい冬の雪が降っている。北国の春はまだ遠い。私は誰かの心の雪を溶かす太陽のような温かな笑顔でこの一年を過ごしたいと心より願っている。



フランスを旅して



札幌市医師会
五輪橋内科病院
黒田せつ子

一昨年9月、両親とフランスに一週間と少し滞在した。

その頃、弟家族は出張でフランスの南西部の都市に住んでいた。子供は1歳半と5歳の2人で両親は孫のことが心配でたまらない。フランスの地方都市ならきっと英語は通じず、苦労しているに違いない。思いきって私は航空券とホテルをインターネットで手配し、NHKラジオ講座でフランス語のにわか勉強をして夏休みをとって当地に飛んだ。

トゥールーズという美しい街であった。レンガ造りの建物が夕暮れに紅色に染まり、「バラ色の町」の名で親しまれている。大学の歴史は古く学生が多く集まり、近年はエアバスなどの航空産業の中心地となっている。20世紀はじめ、フランスとアフリカを結ぶ航空郵便路線の中継地であった。「星の王子様」の著者サンテグジュペリはこの航空路線のパイロットであり、この街とゆかりが深いということを現地で知った。わんぱく盛りの5歳の甥は、勢い余って公園の池に落ちてしまい、助けようとした私もずぶ濡れになった。その池のほとりには、サンテグジュペリの、愛しい女性を思う、優しい姿の銅像があった。幸い、天気のよい温かな日曜日で、車の往来も少なく、濡れた服に緑の藻をくっつけたまま、とぼとぼと歩いて帰ってきた。

弟達は、駅から15分位のところで買い物が便利、しかも教会や学校が近くにある閑静な良い場所に住宅を借りていた。日本人は周りには誰もいなかったようだが、地元の人達は子供連れの夫婦には優しく、フランス語が通じなくても身ぶり手ぶりで（つまり度胸で）何とか、上手に暮らしていた。住宅からゆっくり歩いても5分程の小さなホテルに両親と私は滞在した。広くはないが、心配りが行き届き、清潔で良い香りがして居心地がよかった。朝食をすませて3人でゆっくり街を歩き、何かおいしそうなものをお店で買って、弟の住宅に向かう。通りから住宅に入るドアは皆、頑丈な鉄製で、どの家も色形が同じで、容易に区別できない。ドアの番号を確かめながら進み、到着するとまず、外のインターホンから電話をし、中から外ドアのロックを解除してもらわなければならない。そしてドアの中に入ったらきちんと錠を閉め、容易に外部者が侵入できないようにしている。管理人室の前を通り中庭を抜け、棟の2階が住居だった。部屋の窓から中庭が見渡せる。中庭はそれ程広くはないが、子供達の安全なよい遊び場であった。シャボン玉や紙風船で遊んでいると階下に住むインド人の3歳くらいの女の子も一緒に遊ぼうと駆けつけてきた。

サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼路沿いにあるトゥールーズには歴史ある教会や修道院が多くあった。教会の中庭や、ステンドグラスの温かで清らかな美しさに心を奪われた。市庁舎の階段や大広間はフレスコ画で飾られ、身近に芸術の溢れるこの国の豊かさを思った。街には噴水をたたえた美しい歴史のある公園がたくさんあり、そこから放射状に通りが連なり迷路のようであった。

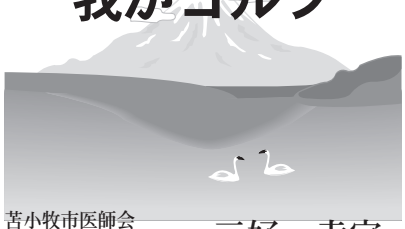
教会の回りや市庁舎の大広場には日曜日に市が立つ。パンや野菜や花、魚、肉などのお店がいくつも並んでお祭りの屋台のようだ。見たこともないようなものもあり、これは何? と味見しておいしければ買う。大きな袋に1週間分の食材をいろいろと買込んで人々が往来する。

フランスという国で、最も印象深かったのは食の豊かさだ。現地栽培の新鮮で豊富な食材がおいしくないわけがない。パリから乗り継いだ飛行機から見える景色は、どこまでも広大な農地で、豊かな農業国であるということがうなずけた。食べ物の値段は日本と変わらず決して安くはないが、人々は皆、食べることに労を惜しまず大切に過ごし、ゆったりと豊かに生活を営んでいるように見えた。食の安心ということは、生きていくのに実に大切なこととあらためて思い知った。

かえりみるに、日本は食料自給率がとても低い。農家は生産を抑制され、飛行機からみえる景色は狭い土地にゴルフ場が目立ち、フランスとは大違いである。日本の未来が心配になった。日本でとれる新鮮で安全な食材はこれからどれ程確保できるのであろうか。本当は、国が支援すれば、いくらでもできるはずなのだ。他国との輸出入の均衡を保ちながらも、少しでも食料自給率をあげるような農業政策に転換すべきなのではないかと強く考えさせられた。

滞在中、ロートレックの町アルビや、アヴィニヨン、アルル、マルセイユまで列車で足を延ばした。時間に追われない贅沢な旅であった。にわか勉強のフランス語は役に立たなかったが、片言の英語でも何とか乗り切ることができた。しかし、レストランではメニューが全くわからなくて困った。弟は電子辞書を携帯していたが、あれはよいかもしれないと思った。

我がゴルフ



苫小牧市医師会
三好内科胃腸科クリニック　三好　幸宣

ゴルフを始めてからかれこれ30年程が経つ。さほど運動能力に恵まれてはいないが、止まっているボールを打つのだからと我流で始めた。

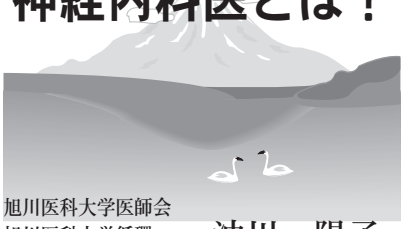
練習場では「野球打ちだナ」との囁き声、誰のことかと周囲を見渡すとそれらしき人はおらず、自分のことと知り愕然とした。

旭川、釧路、苫小牧と風雪流れゴルフ。ピーク時には結構80台で回っていたが、昨今ではすぐに100叩き。1～2番手飛びが違うとすすめられアイアンを変えた。確かに飛びは違う。1～2番手飛ばなくなった。何番使ってもさほど飛距離に差がなく、何事も初心に返るのは大切なことだが、初心者に戻ってしまった。セカンド地点ではキャディに黙っていてもスプーンを手渡され、そこそこ当たってもグリーンに届かない。次にピッチングでアプローチ。何とかボギーと思うとシャンク。反時計回りにグリーン周囲を回る。今度はシャンクしないようやや強くと思うとトップ。ホールアウトが遠い。使うクラブはほぼ限られ「こんなにクラブいりませんネ」という。う・うるさいわい！

かくしてハーフエイジシューターとなる。コンペはなるべく避けるようにしているがＢＢ、ＢＭは妻の知るところとなる。景品は無地のしにしてください。

しかしメタボの私にとって、ゴルフは格好のスポーツである。平日、晴天のゴルフは最高だ。前後にパーティーはなくゴルフ場を貸し切ったようで青い空、澄んだ空気、鳥のさえずり、至福の時。プレー代も安い。青空に向かってボールはグィーンと伸びず失速してしまうが、この環境はたまらない。筋力も落ち、身体も硬くなってきているが、今年も元気にゴルフをやるぞ！

神経内科医とは？



旭川医科大学医師会
旭川医科大学循環・呼吸・神経病態内科　油川　陽子

北海道医師会から突然お手紙がきたので、会費を滞納していたのだろうか、と思いながら封を切ったら「新春随想」の原稿依頼でした。「無作為抽出」で滅多に懸賞に当たらない私がどうして当たったのかはわかりませんが、諸先輩方を前に僭越ながら筆を執らせていただこうと思います。

私は現在神経内科を専門に診療しています。「神経内科」というものが、「小児科」や「眼科」や「外科」のような科ほどよく知られていないことは学生時代から知っていたつもりでしたが、今に至るまで、まさかこれほどまでとは思ってもいませんでした。

まず初めに家族には、そんな聞いたこともない科に行って食べていけるのか、と心配されました。説明が面倒だったので、多分、と手短に答えて入局しました。学生時代から習っている茶道の教室では、一緒に習っているおばあちゃん達に何科？と聞かれて、「神経内科です」と答える度に「まー、うちの主人最近鬱っぽくて元気ないから診てもらおうかしら、ちょうどいいわー」と盛り上がられ、未だに訂正できずにいます。意外なことに一番高齢である先生が一番正確に理解されていました。聞けば知人が脳梗塞で神経内科に入院していたことがあるとのことでした。

出張先の病院では「精神疾患障害」の書類を持ってくる患者さんや「心療内科」だと思って悩みを持ってこられる方も季節折々に来院されます。とある病院で神経内科外来の立ち上げに関わらせていただいた時、初日の栄えある第一号の患者さんは「私、更年期障害なんです。いつもイライラして、動悸がして、顔がのぼせて、ぽっぽと汗かいて、でも寒くなったりもして、むくんでいるような気もして、でもむくんでなくて・・・（以下略）」と訴えられ、ちょっぴり力が抜けました。もちろん一応神経学的所見をとって異常のないことを確認した上で、しかるべき科をご紹介申し上げました。上の先生達に嘆いたら、「そんなのざらだ」と一蹴されました。ただ、「あとはそこからいかに本物を見逃さないかだね」とも言われ、うーん、やっぱり外来診療って難しい、と思う今日この頃です。

神経内科は「狭くて深くてマニアックだという印象があった」とポリクリで回ってくる学生達によく言われます。幸いその印象はたいてい払拭されるそうです。実際、患者さんは「めまい」「頭痛」「ふらつき」「歩きにくさ」、時に「意識障害」といったよくある症状・状態で来院もしくはコンサルトされます。その鑑別疾患は実に多科にわたり、原因疾患への大事な橋渡し役、振り分け役になることがあります。また守備範囲は、脳、脊髄、自律神経、末梢神経、神経筋接合部、筋肉で、それらの中でさまざまなメカニズムの疾患を日々同時並行で診ています。つまり血管障害、変性疾患、遺伝性疾患、奇形疾患、感染症、炎症性疾患、自己免疫疾患、代謝性疾患、内分泌疾患、発作性疾患、悪性腫瘍（この場合は時に脳外科にご相談となりますが）とあらゆる疾患を扱っているわけで、それ故他科との共同治療も割に多い方なのではないかと思います。

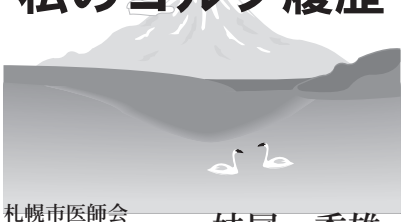
神経内科には、時として初診では原因がぱっと見当がつかないことがあります。さらに心電図のST

変化のようなビジュアルな評価項目が多くなく、神経学的所見自体が個々の神経内科医の腕に委ねられる、かつ数値で測りにくいものでもあります。それが難しさでもありますが、逆に自分のとった所見から病変部位を推定して見つけることができたり病気を見つけることができた時には格別の嬉しさでもあります。

かつて1987年の「Neurology」に、「Sherlock Holmes;Neurologist?」という文章が掲載されたことがあります。2005年と2007年の「神経内科」にも訳と解説が紹介されているのですが、そこには、神経学的診察法は実はホームズの探偵方法と非常に類似しているのではないか、ということが書かれています。つまり、良く問診した上で主訴や病歴から病変部位・その性状を予測し、それに準じる所見があるかを神経学的診察で確認するthree step diagnosisのことを述べているのですが、作者のドイル自身が医師であり、観察力・洞察力に優れた実在の上司をモデルにしていることも十分な裏付けとなっています。また嬉しいことに神経疾患も少なからず登場しています。

もちろんそこに述べてあることは神経内科だけではなく全科の診察方法に共通することなのですが、それは根っからのシャーロッキアンである私には非常に親しみを感じた文章であったとともに、知識と技術と五感を磨いて、いつかホームズのような・・・とはかなくも遥かな夢を抱かせた文章でもあったのでした。

私のゴルフ履歴



札幌市医師会
西岡病院
妹尾　秀雄

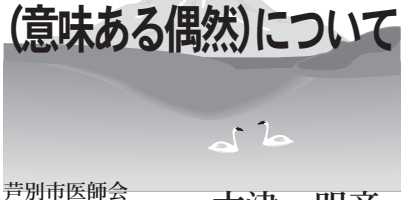
自分が還暦を迎えるとは想像もしていなかったのですが、気がつくと60歳・還暦となりました。ゴルフを始めて25年になります。ゴルフはなかなか上達しないものですが、自分では一歩一歩基本から納得しながら過ごしてきたように思います。振り返るとゴルフを通じて多くの人とのすばらしい出会いがありました。北見でゴルフを始めました。時間も取れなくて、適切な指導を受けることもなく、あくまでも自己流にベンホーガンのモダン・ゴルフ等の技術理論等を読みながら練習・実践しました。オホーツクCCの会員となり月例競技に参加し、シングルになりました。シングルになる時に「シングルになる秘訣」を先輩に伺ったら、「シングルになる秘訣はゴルフを愛することである」との名言をいただきました。ゴルフをしない友人に「シングルになりました」と言ったところ「いつ離婚したの？」と問い返されて苦笑したこともありました。

平成6年より札幌に来まして、羊ヶ丘CCの会員となりました。札幌地区ドクターズシングル会・札幌クリニシアンズに入会させていただきました。「北海道ドクターズ」「北海道ドクターズゴルフ選手権」「ブロック対抗全道ドクターズゴルフ競技大会」のいわゆるドクターズ三大メジャー大会に参加させていただきました。まぐれで好成績を挙げたこともありました。いくらかの自信を持っていましたが、上には上があるもので目標とすべき先輩が多数いらっしゃいました。輪厚や島松のグリーンは強気に打てた頃は何も感じなかったのですが、ビビリ始めた頃からいわゆるイップスに陥りました。パッティングの研究をした結果、デイブ・ペルツ著「パッティングの科学」にたどり着きました。ゴルフの技術理論（ベンホーガンのモダン・ゴルフ、デビッド・レッドベターのアスレチックスイング、ザ　タイガー・ウッズ　ウェイ等々）、最大瞬発力の出せる呼吸法、スコアの良くなる歩き方、コース攻略法（ティーグラウンドからの攻略法からグリーン上のパッティングラインからの攻略法）、道具に関する知識（止まるボール、止めることのできるウエッジ、ゴルフは道具だ）、メンタルトレーニング（ほめ殺し方法、集中力の高め方）等々について情報収集と実践応用に勤しんできたところです。

目標を持って研究・研鑽しているところですが、還暦を迎えて最近感じることは体力面の強化が必要な年齢であることです。来るべきゴルフシーズンに向けて体力強化トレーニング中です。健康づくりの指導を専門とする小生は、「平均寿命まで楽しめる趣味を持ってください」「メタボリックシンドロームにならないように」等々お話させていただいていますが、エージシュートを達成されている先輩を見るにつけ、まさしく人生の達人でありお手本であると尊敬しています。

本年こそはさらなる「心・技・体」の強化に努め、「タイトル奪取」を目指します。若くて元気の良い後輩を多数勧誘し、諸先輩の築いて来られたドクターズ三大メジャー大会の発展に向けて尽力する所存です。本年もよろしくお願いいたします。

シンクロニシティ（意味ある偶然）について



芦別市医師会
芦別精療院
木津　明彦

年々歳々花相似、歳々年々人不同（劉希夷「代悲白頭翁」より）。

会員の年男（女）のうちから「無作為」に抽出され（48歳代表？）、本稿を書かせていただくことになった。単なる偶然なのか、「袖すり合うも他生の縁」なのか、首をかしげながらパソコンに向かっている。テーマは自由ということなので、今回はこれまでそこここで述べてきた頭書の話題について述べることにする。

私（精神科医）の診療上のスタンスは、生物学的精神医学と学習理論（認知行動療法）に基づいており、「無意識」とか「防衛」とかといった抽象的な概念を用いて解釈したりはしない。ところが、日常生活にあっては、どうしても単なる偶然とは思えない、あるいは解釈しないではいられないことに遭遇する。

たとえば、娘が生まれた時、私は「花も実もある人生」を願って、「花梨」（カリン）と名付けた。「檸檬」でも「林檎」でもよかったのだが、なんとなく音の響きがよかったので、そう名付けた次第である。そして、庭に花梨の木の苗を植えたのである。

5年後の秋、香川県に学会出張したとき、弘法大師・空海が修築したという周囲約20kmの日本一の灌漑用溜池である「満濃池」に足を延ばした（学会をさぼったのである）。池の畔には案内板があり、「弘法大師は工事の際、人夫のために、体力回復や鎮咳などの薬効のある花梨の木を植えた」と記載されていた。実は、わが家は真言宗で、「えっ」と驚きながら周囲を見回すと、グレープフルーツのような実をつけた花梨の木が一面に繁っている。このとき、私は初めて花梨の実を見たのであるが、しばらくして、わが家の木にも同じ実が成るようになった（桃栗三年・柿八年とはいうが）。この一件は、サイエンスの世界では単なる偶然だろうが、私は「お大師様のお導きだな」と思わずにはいられなかった。超心理学の用語では、このようなことを「シンクロニシティ」（共時性＝意味ある偶然）というようである。

私は幼児のころ、祖母から「オン・アボキャ・ベイロシャノウ・マカボダラマニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン」といった真言（マントラ）を意味もわからず覚えさせられたが、この「オン・アボキャ・・・」は、「光明真言」という大日如来の真言、また、一切諸仏諸菩薩の総呪ともいわれ、宿業・病障を除去し知恵弁財・長寿福楽を受けることができる呪文であることが最近ネットで調べてわかった。

余談ながら、私は有珠山噴火災害の折、避難所巡りをしている時、あるお寺が避難所になっていたのだが、弘法大師の修行像が庭に立っていたので、すぐに真言宗のお寺とわかって気分が高揚したことがある。これも「お大師様のお導き」と言ってしまうのはあまりにも牽強付会か。

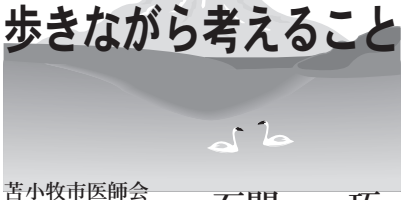
さて、後半は、映画「モリー先生との火曜日」（主演：ジャック・レモン）について申し述べたい。この映画は、数年前、昼寝しながらテレビで放映されているところを「偶然」垣間見たものである。とても印象に残るシーンであったので、ネットの「教えてgoo」に尋ねたところ、たちどころに題名がわかり、さっそくレンタルビデオ屋でＤＶＤを借りたのである。

それは、筋萎縮性側索硬化症に侵された大学時代の恩師モリー先生が、死生観について語るシーンであったと記憶する。いわく「海の波たちが、やがて岸に打ちつけられて砕け散ってしまうと恐れている。でも、ひとつの波が言うのだ。心配することはない。ひとつひとつの波は別々でも、みんな海に繋がっているではないか」云々。

「これって、お大師様の教えなのでは？」と、私はずっと思っているのだが、勉強不足で明確な出典はお示しできない。原作者はアメリカ人のジャーナリストである。ただ、空海著「即身成仏義」に「仏の身体は、すなわち生きとし生けるものの身体であり、生きとし生けるものの身体は、すなわち仏の身体にほかならない。このように、不同でありながら同一であり、不異でありながら異なるのである」（口語訳）という記述が見られる。

以上、「偶然」、特に「意味ある偶然」「必然の偶然」について、日頃思っていることを述べさせていただいた。新年早々、駄文にお付き合いいただき深謝申し上げる。

歩くこと、歩きながら考えること



苫小牧市医師会
あつまクリニック　石間　巧

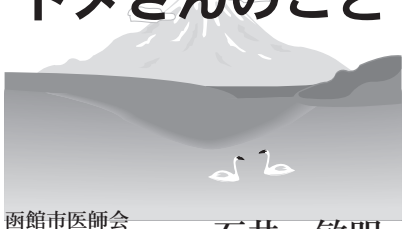
歩くことが好きで、あちこち出かけてきた。大学時代は、ワンダーフォーゲルというところに所属していた。道は舗装されていて、車が多い。車と同じところではつまらない。自然と山道を歩くことが多かった。でも、外国には平たいところで、ただただ歩ける道があると知ったのは最近のことだ。ニュージーランドで、ミルフォードトラックに出かけたのは1998年11月のことだ。あちらの人は自然を壊すのもすごいが、保護するということになったらそれもすごい。1日にエリアに入る人数を制限してしまう。もちろん入り口にたどり着くために、湖で舟に乗らないといけないので可能なのだけれども。そのかわり、花はすごかった。ニュージーランドバタークック。ロッジとヒュッテに泊まりながら、50数キロを3日間で歩く。朝食と夕食は宿で取り、昼食は道ながらランチを取る。ワインも出るし、ガイドもつく。でもガイドは、あまり近寄ってこない。旗も振ってない。ガイドとは言うがネイチャーレインジャーなのだ。日本語を教えてあげた。「どさ？ゆさ！」日本で一番短い会話。日本でいちばん有名なポーズ「シェー」も。楽しい4日間だった。

これで味をしめた。勤務先が変わった時に、いくらか時間ができたので、本元の英国に行ってみたのは2005年10月だった。フットパスという言葉は知っていた。散歩道などと訳されていることが多い。でも、190マイルって。英国本島のアイリッシュ海側から、北海側までの306kmをてくてく歩く、Coast to Coastと称されるフットパス。St. Bees HeadからRobin Hood's Bayまで。湖水地域国立公園からヨークシャー国立公園をぬけて、北ヨークムーア国立公園まで16泊17日間。慣れた人なら14日間くらいで歩くらしい。ガイドなし、一人きり、荷物を背負って。A.WAINWRIGHT著『A Pictorial Guide~A Coast to Coast Walk』だけが頼りの歩く旅。宿は前日に電話で予約する。これが取れない。英語が通じないのだ。B&Bといういわゆる民宿なのだが、外人から変な英語の電話がきたら断りたくなるのもわかる。申し訳なかった。でも…ということでインフォーメーションセンターに行く。ここで、Coast to Coastなどとやるとすぐ取ってくれる。雨など降っていようものなら、他の客をほっておく、靴が泥だらけだと尚良い。終いは、前日の宿のご主人が取ってくれるようになった。あまりに不憫な英語だったのだろう、助かった。

朝食がうまい。コーンフレークやオートミールがセッティングされたテーブルがあって、これ苦手と思っていると温かい皿が運ばれてくる。いわゆるFull British Breakfastというのは、油で揚げたトースト、目玉焼き、ソーセージ、かりかりベーコン、煮豆、マッシュルームとトマトの焼いたの、ミルクティーたっぷり。いつもFullでお願いしていた。昼はビスケットと紅茶。早めに宿に着いて、早めの夕食をパブで取る。本日の記録をつけながら飲むエールがうまい。樽に入った地ビールのようだが、ぬるい。ぬるいがうまい。これをやりながら、魚料理や芋料理やステーキを食う。うまい。ゆっくり30分くらいで飲むので2杯くらいで腹がくちる。翌日の行程を日本語訳しながら食事をすると、だんだんぼーっとしてきて2/3くらいの所で、終了する。大学生の時と同じだと反省する。すると翌日道に迷う。2回迷って、1回公道を歩いて、1回近道した。大学生のときと同じだ。

Shapという街でFell Houseという宿に泊まった。25歳の黒人で、コンピューター関係の仕事を1週間前に辞めたばかりのLouisがやっていた。夜は、スパゲティミートソースを作ってくれて、ワインを飲みながら映画「ボーンスプレマシー」で盛り上がった。話がややこしくて筋はさっぱりわからなかったけど。スパイの話なんだ、スパイの。「日本語でWell comeはなんと言うのか？入り口のドアに貼りたいのだ」「それは「観迎」である」間違えた。日本の恥だ。Glaisdaleの宿で29歳のPaulと話した。ロンドンに住んでいて検査技師をしている。週末は、一人でフットパスをこつこつと歩いている。うらやましいけど暗い。Shapの宿でLouisから聞いて追いかけてきたそうだ。翌日、終点のRobin Hood's Bayで会おうと約束した。海でずっと待っていたのに会えなかった。メールアドレスはPCが壊れた時に消えてしまった。もしこれを読んでいたら連絡ください。無理か。

トメさんのこと



函館市医師会
亀田北病院　石井　敏明

坂田トメさんは自分の生年月日を間違え、年齢も忘れ、久しぶりに会ったたった一人の妹を誰なのか思い出せないほど認知症が進んだ大正一桁生まれのおばあさんであった。

父親の仕事の都合で満州国で生まれてその地の女学校を卒業した後、第二次世界大戦の末期に函館市に移住した。そこで造船会社に勤めるサラリーマンと結婚したが子どもに恵まれず、15年前に病気で夫を失ってからはずっと独り暮らしを続けてきた。

トメさんは80歳を過ぎた頃から私が勤める病院と棟続きの介護老人保健施設に入所しており、しばらくは入所者仲間の面倒をよくみるリーダー格としてそこでの生活を楽しんでいたが、半年前から施設の職員や他の入所者に乱暴な口をきいたり、時々手をあげることがあるということで1カ月に一度、車椅子に乗せられて私の外来に顔を見せるようになった。そんなときは、大方機嫌がよく、両手を叩いて拍子をとりながら、私には耳慣れない民謡を元気な声で歌って聞かせてくれた。

最近になって、トメさんは体調を崩し、この1カ月の間に二度も函館市内の別の病院に入院を繰り返したが、二度目の入院中の平成20年8月初めに頑固な拒食と医療行為への抵抗のため、私が受け持つ認知症病棟に転院してきた。

点滴注射をするために看護師が針を刺すときだけは「痛い」と怒りの声を発するが、それ以外は何を聞いても話そうとせず、食事介助をする職員がスプーンでお粥を口元に運ぶとそれを手で払いのけるのであった。

JRを乗り継ぎながら8時間かけて見舞いに来た妹は「もともとそんなところはありましたが話もしてくれません。何のために時間をかけて来たのか分りませんでした」と落胆の表情をみせ、「よろしくお願いします」と言い残して帰って行った。

私は毎朝、外来を始める前の1時間を利用し病棟内を一回りして患者さん達の様子を見るのを常としているが、トメさんのベッドサイドにしゃがみ込み、「トメさん、おはようございます」と声をかけてみても目を開いてこちらを向くことはなく、顔のあたりに手を近づけようものならぴしゃりとその手を素早く打った。

その後、私は朝と夕の二度、トメさんのベッドサイドにいくことにした。ある朝、私はトメさんの掛け布団に手を置いて、「元気が出たら車椅子で外を散歩しようか」と話し掛けると、少し間をおいてトメさんの右手が私の手の甲に触れた。

9月半ばの、空が抜けるように澄んだ日の午後、私は病院の構内をトメさんが乗った車椅子をゆっくり押していた。上半身を窮屈そうに左に傾けたままのトメさんが突然、「虫が鳴いている」と言った。病院の敷地の境界は鉄製の柵で仕切られていて、その向こう側は雑草が生い繁っている。リリン、リリン。弱々しく鳴く虫の音にトメさんは気付いていた。

私は柵越しに穂先がまだ若い芒と小さな白い花を数輪つけた野菊を幾本か手で折ってトメさんに渡した。トメさんはそれを両の手で握り胸元に抱くようにした。

「枚野にたてる学舎はわれら乙女が集い来て…」トメさんは低いがしっかりした声で歌い始めた。「何の歌なの」と聞くと「庁立女学校の校歌」と答えた。トメさんのしわしわの両の目尻にうっすらと涙が浮かんだ。

病院の正面玄関に車椅子をとめ、私は売店に駆け込んだ。かつてトメさんの好物であったどら焼きとパック入りのフルーツジュースを買い求めてトメさんのところへ戻った。

トメさんは静かに待っていた。袋を切り、取り出しやすくしたどら焼きとストローを差し込んだジュースパックをトメさんの膝にかけられているタオルの上に並べて置いた。一呼吸おいた後、トメさんはストローを口に含むと精一杯の力でジュースを吸った。

その日以来、トメさんは私の手を払いのけることをしなくなったが、少しずつ貧血が強くなり、血液の電解質バランスが崩れ始めた。

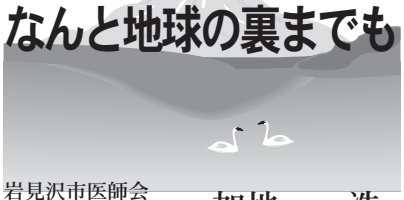
私はずっと以前から決めていた予定のために1日だけ病院を休むことになり、日中の仕事を終え、いつもより遅い時間にトメさんの所へ行った。

「トメさん、明日は休ませてもらいますよ」と声をかけると、トメさんの左手がしゃがみ込んでいる私の顔近くにゆっくりと伸びてきた。やせ細っているが温かい五本の指と掌を私は少し強い力で包むように握りしめた。

翌朝、7時を過ぎて間もなく、夜勤の看護師から私に電話が入った。

「坂田トメさん、眠るように亡くなられました」平成20年9月最後の火曜日であった。

趣味と実益は なんと地球の裏までも



岩見沢市医師会
北海道中央労災病院　加地　浩

いまでこそ病院勤務からは解放されたものの、現代はストレスだらけでクレイジーで何でもありのまさに激動の時代である。働く喜びとはうら腹に、働き方というもののあり方、難しさをつくづく考えるこの頃である。この春まで当労災病院に2度目の勤務となった7年間は日々12時間程度は職場で過ごしたが、これに通勤時間を含めると拘束時間は長い。過重労働の判断基準は仕事の種類や質は規定しきれないので労働時間が主要な目安になっているが、その計算からすればそんな基準は昨今の勤務医なら誰しもがすぐに満たしてしまうだろう。研究職などが好きで興味ある仕事に燃えている場合は思ったほどに疲労は覚えないものだが、義務、期限付や命令下での仕事はストレスフルであり疲労に繋がるものである。

10年間所属した前任の産業医科大学では労働と健康に関する問題は全てが研究の対象となる。産業生態科学研究所を中心としたJICAの産業医学集団研修コースでは毎年約半年間、発展途上国のその道の研究員やお役人、専属産業医らが研修するが、座学のみならず事業所訪問による現場実習として水俣から関西方面までの特長ある企業や健診機関も見学していた。小生は毎年1週間ほどJICAのスタッフ一名と共に引率者として彼らと旅に出る役目があり、中、韓、英、伯、ポルトガルなどの言葉が飛び交う中、ちょっとした修学旅行に出掛けたものである。国内にいながら終日、各国語に囲まれ国際色はたっぷり。しかし英語のみが共通語でかつ大多数にとってそれが第2外国語であるからジャパニーズイングリッシュ？でも用は足りたが、もっと上手になりたいものと痛感したものだった。

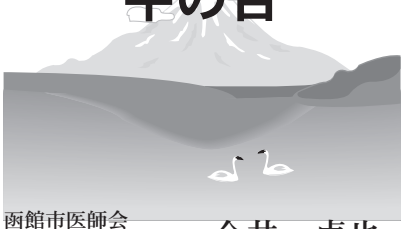
コースも残り1カ月ほどとなった或る日、ブラジル出身の女性医師マリアから“先生、サックスと合奏をするといっていたが、それはいつになるのか？”と聞かれて驚いた。どうやら移動の列車内で、なにかのついでに話題の一つとして口を滑らせたらしい。約束を破るのも悪いので、あわてて区民会館の音楽室を借り、私はアルトサックスやリードの準備を始めたが、彼女はそれを待ちきれずにいきなりピアノを弾き始めた。どうやら私のサックスは話の種にすぎず、実はホームシックと久しくピアノを弾いていないための禁断症状、欲求不満が限界にきていたらしかった。彼女は暗譜でドビッシーの小品数曲をさらっと、次いでヴィラ・ロボス（伯）のバキアーナ第5番を誇り高く一息に弾いてやっと気が済んだらしく、一段落したところで用意していった2、3曲を合奏して楽しむことができた。ドビッシーもヴィラ・ロボスも半年間まったくピアノに触れていない“医師”がそのまま暗譜でよどみ無く弾くほどやさしくはない。なぜそれほど軽々と弾けるのか理由を聞いて見ると、音大のピアノ科卒業後、進路を変更して医学部を終え、今回のコースに参加したとのことだった。楽しかった一方で軽率なことは言えないものと悟ったものだった。

数年後、旧労働省の産業保健ミニプロジェクトでリオのCESTEHというオズワルド・クルス財団の職業環境生態学研究センター（とでも略すであろうか？）に国際協力で派遣されることになり、正味1カ月間にわたり職業病全般について講義することになった。北九州での冷房の止まった熱帯夜で約1カ月間、夜な夜な資料作成に取り組んだ思い出がある。

ロスでの乗り換えを含めて28時間後、無事リオ国際空港着。今後の仕事の勝手がまだわからないまま臨んだ歓迎会では緊張せざるをえなかったが、所長はじめ皆が好意的であり、まずは一安心。なんと驚いたことに、そこにまたあのマリアが先方組織の一員として出席していたのである。現地での滞在はコパカバーナ・ビーチの某ホテルの30階、朝夕は毎日車で研究所間を送り迎えされたが、治安上の理由で原則外出禁止を言い渡された。しかし彼女のおかげで自宅のパーティーにも招かれ、100年前に作られ、初孫だった彼女のために幼少時に祖母から贈られたという蜀台付きのピアノで再びバキアーナ第5番を、また80才近い母親も耳慣れない独特の響きとリズム感のある自国のピアノ曲を数曲弾いてくれた上、隣家の若いオニイさんと元気にサンバを踊って見せてくれ、腰の痛い私にまでステップを指導してくれた。また、帰国も真近に迫った頃には、彼女の実弟のマンションでギターとヴォーカルによる4人グループがボッサ・ノヴァをたっぷりと演奏して送別してくれた。地球の裏側でのまさかの再会が懐かしい。

ふと口を滑らせたサックス演奏の話題がきっかけでこんな国際交流もあったが、冒頭のストレスフルなわれわれの日々は気分の転換が不可欠である。小生の場合は休日にカラオケをバックに3時間ほど演奏すれば気が済むしよい全身運動になり、今では3本の木管はなくてはならない身体の一部になっている。職場のメンタルヘルス問題には本人の要因と職場の要因が関与するが、何といっても誰もがストレスを避けられないのが現代社会である。職場の問題の解決に並行して、個人としても自己防衛が必要で、そのためにも打ち込める何かを自分なりに開発することも望まれる。趣味の木管演奏はいまやわたしの必需品、これにも救われて何とか任期を満了できた気がして感謝しているこの頃である。

牛の舌



函館市医師会
金井内科消化器科医院　金井　卓也

今年で私は6回目の年男を迎えた。干支で人間の性格や度量、才能が推しはかれるものではないが、どちらかというと私は牛に似てもっさりしているのではないかと思う。

牛にまつわる言葉であまり感じのよくない言葉が多いのが私には不満である。

いくら干支が人間性を規定するはずがないとせせら笑っても、次のように続くと丑年の私はいささか不愉快になってくる。

牛の歩み（進みののろいこと、国会の先生方が議事進行妨害によく使う戦術）、牛を馬に乗りかえる（にぶいものを捨てて、はしこいものにかえる）、牛の一散（平生ぐずぐずしている人が調子に乗ってよくも考えずに決断をすること）、牛の籠抜け（鈍重なものには手際のよいことはできない）、牛に経文（馬の耳に念仏と同義）、牛は願いから鼻を通す（自分から求めて災いを求めるたとえ）、牛に対して琴を弾ず（高尚なことを言っても志の低いものには理解されない）等々であるが、いい諺もある。牛の涎（よだれ）である。表現が少し汚いが細く長くの意で商売のありように使われる。

これは広辞苑から拾ったものであるが、私には牛の涎以外はすべてあてはまっているようでますますいやになってくるのである。

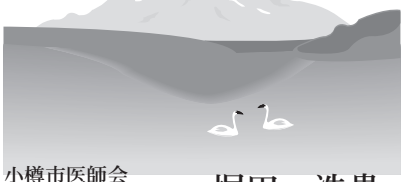
まったく違う話になるが、可憐な花にそぐわない名前がついている花々がある。

牛の舌、おおいぬのふぐり、くされだま、へくそかづら、やぶじらみ、ままこのしりぬぐい、はきだめぎく、わるなすび、くさい、しょうべんのき等々よくもまあこんな名前がつけられたものだと思う。私の手もとに図鑑から写した写真集があるが、どれも可愛らしい花達である。

牛の舌はその葉が牛の舌に似ていることから名づけられたという（学名はStreptocarpus wendlandii）。

舌といえば二枚舌という言葉がある。これは選挙前と選挙後の政治家に使われる言葉なのか。

牛を喰らう会



小樽市医師会
北海道済生会小樽病院　堀田　浩貴

記憶があやふやとなりつつある昨今であるが、前回の丑年のことなので間違いなく十二年前のことである。

仕事の合間のちょっとした会話で、私の尊敬する上司もまた丑年で、いわゆる一回り違うということがわかった。また一緒に働いていた研究室の女性も偶然丑年であることがわかった（一回り下ということにして欲しいとのことだった）。何となく話が盛り上がり、理由は定かではないが丑年を記念して丑年生まれで集まり、"牛を喰らう会"というのを行おうということとなった。

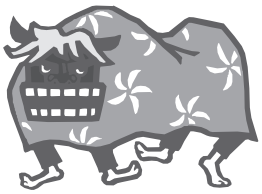
場所は上司の一声で、当時学生勧誘で使っていたすき焼きとしゃぶしゃぶの食べ放題の店に決まった。一皿目と二皿目のクオリティが明らかに異なり、さらにお代わりを注文すると出てくるのにものすごい時間がかかるというお店だった。それでも予約を済ませて、その日が来るのを楽しみに待っていた。

異変が起きたのは、その次の日からだった。どこから伝え聞いたのか、“牛を喰らう会”に是非とも参加したいという希望者（同僚）が相次いだのだ。「残念ながら丑年生まれの会なのだ」と何度も何人にも言い、その度に諦めてもらった。

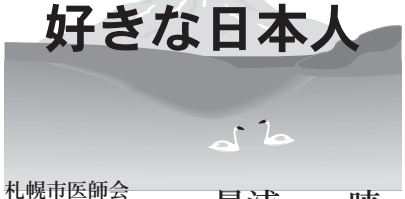
しかし宴会好きの血が騒ぐのか、一緒のチームの一つ年上の先輩と一つ年下の後輩数人から毎日毎日しつこく食い下がられた。その執念深さは恐るべきもので、とうとう絶えきれなくなり、苦し紛れに丑年の前後一年は参加可としてしまった。

すると今度はそれを伝え聞いた他の者達が血相を変えてやってきた。「鼠や虎がいいのなら、なぜ辰や馬は駄目なんだ」とのことだった。確かにそのとおりだ。何事も例外を作ってはいけないという鉄則が浮かんだが、後の祭りであった。結局は“丑年あるいは前後一年違い、または丑年のヒトを知っているヒト”が参加OKとなった。

当初3人の予定が、十数人という比較的多人数になってしまった。予想通りお代わりが出てくるのが極めて遅かったことは今でも覚えている。その他何をどのように食べて、飲んだのかなど全く覚えていないが、食べ放題のすき焼きやしゃぶしゃぶを喰らうだけなのにあれだけ盛り上がった当時を懐かしく感じる。そんなくだらないことがとてつもなく楽しい時代だった。



サプリメントの好きな日本人



札幌市医師会
いとう整形外科病院　景浦　暁

近ごろサプリメントという名のいわゆる健康食品がちまたで大いに持てはやされている。経済的に潤った長寿大国の、美しくありたい、健康でありたいとの人々の飽くなき願いが、とりわけわが国では強いように思える。そこに大きなビジネスチャンスが生まれる素地があるわけで、各種医薬品まがいのサプリメントが著明な薬効を有するかのように大々的に宣伝されており、それに乗せられて多くの人々が通信販売で購入しているのが実情である。中でも最近特に目につくのは、グルコサミンやヒアルロン酸、コンドロイチンである。

テレビの宣伝でいかにも辛そうに階段を降りてくる高年のご婦人が、グルコサミンを服用してからすっかり膝の痛みが消えて、すたすたと歩いてみせる。新聞では、今最も注目されているのがグルコサミンとコンドロイチンだと宣伝され、多くのメーカーが凌ぎを削り、値引き合戦に留まらず、万歩計やサポーターの景品を付けるなどエスカレートしている。また別のメーカーの全面広告では、ヒアルロン酸＋コラーゲンが加齢とともにいかに不足してくるかがグラフで示されて、だから毎日飲み続けないと今にあなたも歩けなくなりますよと恐怖心を煽っている。この1、2年ではとうとう黙って見過ごせなくなったらしく、正規の製薬メーカーまでもがこの分野に進出し始めた。

ところで、サプリメントとはどういう代物なのだろう。Supplementは、「書物の増補・追加・附録」などの意味である。若い頃、大学の医局にいた折りによく紐解いた文献に、Acta orthopaedica scandinavicaという権威ある北欧のドイツ語の雑誌があったが、年に1回必ずSupplement volumeというのがあって、いくつかのテーマごとに重要な文献が纏めて紹介されたり、あるいはEditorialが味なコメントを書いていたり、時々孫引きで利用したりしたものである。その真の意味は、これは追補版であるけれど極めて重要な情報が収載されている、とっておきのエッセンス版と理解するべきなのだ。

こうしてみると、つまりサプリメントとは、補足するものという意味であるが、健康食品の分野での真の意味は、「確立された薬効を持たないが応分の栄養食品として健康に寄与する物質」とでも定義できるであろうか。そうなると、現在おびただしい広告に掲載され、あるいはテレビで放映されているこの種の健康食品の薬剤としての効能効果は、過大広告にならないのだろうか、あるいは虚偽の広告にならないのだろうか、まして薬事法違反にならないのかと危惧される。

かつて、日本整形外科学会の基礎学術集会で、グルコサミンに関するシンポジウムが開催され、動物実験や臨床治験の結果が報告されたことがある。しかしながら、どのシンポジストも明確なエビデンスを報告するには至らず、結局臨床的に有効な成績は得られなかった。私自身もそれまで聞いたこともないグルコサミンという物質について、関節疾患との関係について文献検索を行ったことがあるが、何ら有効な論文は得られなかった。

コンドロイチンについては、現在でもコンドロイチン硫酸はカシワドールやロイサールなどの鎮痛剤の成分に含まれているし、単独でコンドロンとして注射液と点眼剤が存在するが、かつて関節リウマチ等に処方されていた内服薬としては現在では効果が疑問ですでに収載されていない薬剤である。

他方、ヒアルロン酸塩は、変形性膝関節症に対しては20年以上前から関節腔内注射薬として確立した成績を挙げており、現在整形外科の外来診療で最も多用されている薬剤である。それでも、その有効性は変形性膝関節症では北大整形外科病期分類で1から3期までに限られ、4期のほとんど関節軟骨が摩耗消失した段階や、5期（末期）の人工関節適応期ではもはや効果は少ない。まして、変性断裂した半月板によって強い運動痛などの症状が前面に出ているタイプでは、ヒアルロン酸剤は全く効果がなく、関節鏡手術の適応となる。

このような症例こそ、階段の昇降が強く傷害されるわけで、それに対して経口投与でのグルコサミンやヒアルロン酸が有効であるはずがないのは自明の理である。にもかかわらず、外来に通う膝を病める患者さん達のほとんどが、財布をはたいてせっせと無駄な「薬剤」を服用しているのに驚く。「膝の痛みには効果がないですよ」と言っても、洗脳されて信じ切っている彼女らを説得するのには骨が折れる。

こんな事態を放置しておくと、正しい医療は次第に崩壊していきかねない。医師会や学会は、もっと声を大にしてメディアを通じて積極的に意見広告を出し、効果のないサプリや怪しげな民間療法に警鐘を鳴らすべきである。

経済至上主義という宴の終焉

札幌市医師会
麻生内科クリニック　堀川　博通

振り返るとわれわれも迂闊であった。19年6月中旬、ビルのオーナーS氏がビルの予備契約書は存在するが正式ではなく、持参した契約書に至急押印してほしいと伝えてきた。その時は詐欺や転売などは全く予想せず奇妙に思いながらもわれわれは押印した。後で判明したことは新規作成した契約書は、所有権移転時オーナーに不利となる文言が全て削除されていた。7月中旬にS氏から関東の通販会社にこのビルの所有権を移転したという通知書が郵送された。S氏は不動産バブルに沸く東京市場でわれわれに相談せずにビルを高価格で売り抜けていた。われわれには晴天の霹靂であった。

8年前当院の患者であったS氏から店舗閉鎖後の土地に医療テナントビルを建設したいとの申し入れがあり、われわれがテナントを集めてそのビルに入居した。空室が多い地域でのこのビルの賃料は破格であったが、S氏の会社経営状態は悪くわれわれはその損失補填を考え、この金額を了承したという経緯がある。この価格には信頼や助け合いなど米国流金融には理解不可能な意味が込められていた。売却通知後はわれわれとの交渉には応じず、後は銀行の立会いのもとに残金の支払いとビルの7億円強の根抵当権抹消が行われ所有権は通販会社に移転すると伝えられた。

この2カ月後S氏の会社は民事再生法を申請した。この時点で銀行が貸し剥がしを行っていたのである。ビルの建築資金など詳細を知るわれわれに適正価格で売却するよりも、バブルに沸く東京市場で高値で売り抜けるシナリオは銀行が書いたようだ。「われわれも賃料値下げ交渉を要求し、結果次第ではこのビルから退去する。退去によってこのビルが不良物件化しても、責任は契約書改ざんや告知義務違反を犯したS氏と仲介業者が負わなければならない」と通告すると、仲介業者は慌てて所有権移転前夜にわれわれと通販会社を引き合わせた。会談の中でビルの価値は有力テナントの存在と継続入居にあり、このビルからわれわれが退去することはファンドの目論む証券化商品としての価値が損なわれることを理解させ賃料減額を承諾させえた。

後日、通販会社はS氏にわれわれが通告した事実をもとに告知義務違反を盾に購入価格を10%値引きさせたようだ。米国金融機関と同様に経済至上主義に陥った銀行も罪深く愚かである。売却前に投機の対象となることを回避するために、われわれに購入を依頼していればわれわれはより高値で買い取っていたはずである。結局、3億円で売却せざるを得なくなり、差し引き約5,000万円を銀行はS氏から回収し損ね、銀行株主に損害を与えた。10月には不動産投資会社から次のような手紙が届いた。「会社をジャスダックに上場したいこと。このビルも不動産小口化商品として売り出すこと。発売前にわれわれに一口500万円で購入を勧めること」が記載されていた。建築士により明らかとなったことであるが、手抜き工事により床は水平ではなく、躯体に亀裂の入ったこのビルや変形した土地にそれほどの価値はない。われわれの存在自体を証券化商品として販売を目論むことはアメリカ流金融工学の発想であろう。

昨夏からの金融収縮により首都圏の不動産バブルは破裂し、今不動産関連事業は冬の時代に入っている。20年9月には米国の不動産相場の悪化を受けて、商業不動産関連投資の損失が拡大しリーマンブラザーズが破綻し、最終的には米国5大投資銀行が全て消滅した。

今回の金融危機は、100年に一度の大きなものであるそうだ。米国流のカネがカネを呼ぶことに価値を求める銀行のレバレッジ金融モデルは、サブプライムローンという時限爆弾入りの証券化商品を世界中に拡散し金融を破綻させ、実体経済を悪化させた。さらに投機資金を操り原油や小麦やとうもろこしの価格暴騰をも引き起こし、世界の多くの弱い人々の生活を脅かしている。

特定商取引法違反で業務停止命令を受け会社存続も危険視されている新オーナーの通販会社や不動産不況の中であえぐ関連投資会社とともに、われわれもこの金融崩壊の大きなうねりの中で翻弄され続けている。「他人の心も金で買える」と公言していたライブドア旧経営者だけがモラルなき経営に走った訳ではないだろう。伝統的経営姿勢を放棄した日本の銀行経営者にも、利益を得るためにはなりふり構わないという米国流経済至上主義が蔓延しているようだ。

巨額の税金という公金が注入され生き延びた米国金融機関で、今年もまた例年通り多額のボーナスが注入された税金を使って支払われるというニューヨークからの絶望的なニュースは、今回の金融崩壊の混乱の収束と再生への道のりが極めて険しいことを物語っている。われわれも今年は厳しい冬を迎えることは間違いなさそうだ。

宇宙開発への「希望・きぼう」

札幌市医師会
MPSレディース健診クリニック　田中　信義

人間　ついにはじめて「月に立つ」1969年7月21日午前11時56分20秒（日本時間）。

THAT IS ONE SMALL STEP FOR MAN, BUT ONE GIANT LEAP FOR MANKIND !!

あの時、月面からのテレビの生放送を狂喜して見ていたことを思い出している。あれから今年でちょうど40年になる。

その間に、国際宇宙ステーション（ISS）の建設が進み、昨年から来年にかけて、日本の実験棟「きぼう」も完成する予定なのでさまざまな無重力下の実験が試みられるのでその成果が期待されている。

さて、こうした宇宙開発の布石が、近未来の「地球周回飛行」や「月観光旅行」や火星などの惑星「移住計画」への夢と希望を広げていくことになれば、人間の将来に必ずや幸運をもたらすものと期待したい。

日本最初の宇宙飛行士毛利衛さんをはじめ、宇宙からスペースシャトルで地球を眺めた人たちは、「国境などみえない、掛け替えのない一つの美しい青い生きた星」であったと異口同音に答えています。人間として良心不在の戦争など核戦争などもってのほかである。

人間は、地球上の一生命体として他の生物と古来共存してきたし、これからの宇宙時代にも共生しながらいつまでもどこまでも好奇心という精神力を保育保持して未知なる宇宙空間へ乗り出して行く宿命体であると確信したい。

今年は干支の十二支で丑年（牛年）である。小生は第6回目を迎えるのですが、25歳から65歳までの40年間、メス手持ちの外科医でした。開腹手術の時などに時々、無重力下のISSでの手術風景を夢想したものです。地上と同じような開腹手術をすれば、腸も出血した血液もまたたく間に浮遊充満してしまい、始末に負えない事態になるであろうことは容易に推測可能です。それでは、無重力下手術とはいかなる方策を考慮しなければならないか。そうだ?!　この10数年来、開発改良発展してきた「内視鏡下手術」ビデオカメラ装置などを無重力下手術室に持ち込む方式を工夫応用すれば、腹壁を開創することもなく小さな導入孔のみで内臓などの浮遊もなく血液などの飛散も防止できるであろう……よ。

近い将来、ISSでの日本実験棟「きぼう」でも実施されるであろう宇宙医学の基礎的実験の一環に、「宇宙手術々式の検討」も組み入れられる日を、夢中で遊んでいる孫たちに期待し希望を持って楽しみにしている今日この頃である。

人知に不可能はない。希望あるのみ!!

YES, WE CAN !!

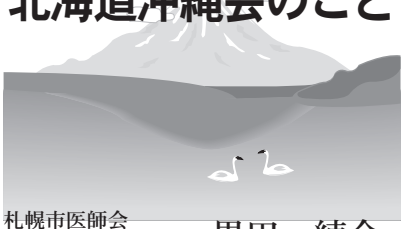
自筆書「丑」

もしも望みが叶うなら

空知南部医師会
梶整形外科医院　梶　良行

祖父は50で祖母63
72歳が母ならば　頑固な親父は82
それぞれが娑婆に別れを告げた年齢（とし）
春夏秋冬200と40
回を重ねて季節はめぐり
自分は還暦60歳
そろり近づくあちらの世界
今日までこうして生きられたのは
親のおかげと感謝する
合掌解いてまわりを見れば
かなしい　かなしい　ことばかり
もしも望みが叶うなら
空から白い雪に混ぜ　水戸黄門を降らせます
悪事働く代官と　欲にかられた商人を
あの紋所で懲らしめたい
もしも望みが叶うなら
人の情けとやさしさを　爆弾の火薬と詰め替えて
世界の空から降らせます
生きることの幸せと　愛することのよろこびを
すべての人に伝えたい
もしも望みが叶うなら
世界を笑顔で満たしたい

北海道沖縄会のこと



札幌市医師会
平和病院　黒田　練介

北海道沖縄会の会長を引き受けてもう5年になる。軍医として沖縄で戦死した父を知る前会長のＳさんに頼まれたのである。

Ｓさんによれば、昭和20年5月沖縄南部首里戦線の弁ヶ岳に急造した観測所で、父は中隊長と2人で双眼鏡と首っ引きであった。本来は野戦病院にいるのが当然であろうが、大隊付軍医ということで、そうなったらしい。観測所と第一線陣地の通信任務についていたＳさんには、父は偉丈夫然として頼もしく見え、また親しみを持ったという。5月16日無線電波が米軍に察知されて、砲撃と空爆を受け、壕が直撃されて押し潰され、父は中隊長と一緒に戦死した。午後3時頃のことだったが、無線でそれを知ったＳさんは外に出たが、砲空爆で動けない。６時の米軍の夕食時間を待って、2人の遺体を掘り出し、埋葬してくれたのである。

Ｓさんは後に帰還し、昭和39年、北海道沖縄遺族会を強化拡大し、北海道沖縄会と改称して、初代会長となり、沖縄戦戦没者の慰霊に心血を注いだ。こんなＳさんの頼みなので、私には全くふさわしくないのを知りながら、断れなかった。そこで少しお手伝いをさせていただいてからということになったのだが、全身に砲弾の破片を浴びていたＳさんは、平成15年沖縄に眠る戦友のもとへと旅立ってしまった。

戦場では一見豪快に振る舞っていた父だが、北海道に残してきた家族のことは片時も念頭を離れることはなかったに違いない。応召してから4年足らずの間に、父は実に264通もの手紙を家族に書いたのだから。

父の33回忌法要で沖縄を訪れた母が、心の整理ができ、書簡集として自費出版することになった。そこに母の詠んだ歌がある。

――駅頭に子ら抱き挙ぐるが夢といいしに　あわれ駅頭に子に抱かれる――

小学校3年生だったが、白い布に包まれた木箱を手にした時のことを、今も思い起こすことができる。しかし中には、小石が入っているだけだった。

遺骨が遺族のもとに戻らないという過酷な現実。そのなかにあって、遺骨に代わるものとして、沖縄戦地の血に染まった小石を戦死者の数だけ持ち帰り、それを埋め込んで、昭和40年にＳさんが中心となって、札幌藻岩山麓に記念碑が建立された。

沖縄戦では22万余の同胞の貴い生命が失われたが、沖縄住民以外の戦死者77,000余のうち、北海道出身の将兵が最も多く、実に10,800に達している。毎年6月23日の「沖縄慰霊の日」に、全道各地や道外からも遺族関係者が記念碑前に集い、慰霊祭を行っている。

また3月には「沖縄巡拝の旅」も続けている。平成20年には恒例の糸満市「北霊碑」前での慰霊祭や本島各地の慰霊碑巡拝後、石垣島を訪れた。「八重守乃塔」に参拝し、石垣島事件の「米軍飛行士慰霊碑」にもお参りした。観光に訪れる若者は多いが、私どものような巡拝は珍しいのか、案内のバスガイドが涙ぐむ場面があった。

沖縄各地には400基を超す「慰霊の塔」が建立されている。そのうち北海道出身戦没者の碑は、判明しただけで44もある。戦争中、米軍は自国軍将兵の遺体は万難を排しても収容したが、日本軍の場合、負け戦でもあり、その余裕はなかった。野ざらしの遺体や遺骨を住民が埋葬し、碑を建ててくれた。建立のために献金した人の名前が、わずか数円という金額と共に刻まれた碑がある。しかし、いまだ数千体もの遺骨が収集されないままだということを忘れてはなるまい。

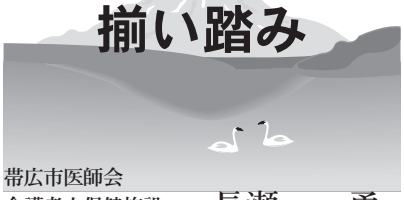
思えば沖縄はかつて琉球王国という小さな独立国で、武器を持たず、争い事は話し合いで解決するのを常としていたという。外来の訪問者に対しても礼儀正しくもてなし、「守礼の民」として知られていたのである。「北霊碑」前での慰霊祭には、今なお沖縄県知事等からの供花が絶えることなく続いている。沖縄の人々への感謝の気持ちを忘れてはならない。

会員は高齢化しているが、広報活動や会報の発行などにより、会員の減少に歯止めがかかり、ほっとしているところである。今後も慰霊を通して、戦争の愚かさと平和の尊さを訴えるささやかな活動を続けていきたい。

新春随想としては、ふさわしくない内容になったようである。戦後世代が4分の3を超える今日、戦争体験への追認が薄れてきているのは否めない。次世代に沖縄戦を語り継ぐのが当会の課題で、その意義については誰しも異論を唱えないが、その具体化となると容易ではない。沖縄戦の悲惨さをいかに声高に訴えても、若い世代に戦争の実体を理解させ、その原因をつきとめ、恒久平和への願望を培うことにただちに結びつくのかどうか、もどかしさを感じている。戦後63年の歳月が流れた今、感情を抑えた物静かな語り口でよいが、戦争犠牲者の声をうつしとる情念・感性があれば、戦争を語り継いでいくことができよう。真の慰霊とは過去のあやまちを直視し、二度と戦争を起こさない国にすると約束することであろう。

2009年は、1月に米国でオバマ氏が大統領に就任し、米軍がイラク戦争から撤退を始めるという公約が実行されよう。世界の恒久平和実現への第一歩を踏み出す年になるよう願っている。

丑年生まれの揃い踏み



帯広市医師会
介護老人保健施設
アメニティ帯広
長瀬　勇

私は、大正14年2月23日生まれの丑年です。そして私の病院は、どこにもあるような職員数40余名の小さな職場ですが、丑年生まれの人が大正2年の者をトップに、昭和24年の者まで、ずらり4代に渡って揃っているのを自慢にしていたことがありました。「類は友を呼ぶ」という諺があるように、確かにそうだなと思うこともある反面、同じ干支生まれといっても、半世紀近くの隔たりがありますと、物の捕らえ方ひとつにしても、かなりの違いがあって当然なことで、その結果中々面白い逸話も生まれ出ることも多く、そうだ、これを今回の題材にしようと決め書き出していた所、これを覆す出来事に出合ってしまいました。

それは、数日前に私の外来に初老の新患の方が来られました。実は私、数年前に脳梗塞を発症し入院を余儀無くされましたが、主治医の先生ほかたくさんの方々のお力添えにより、予想していたより早く実務に復帰することができるようになりましたが、それ以降は自分の体には十分注意を払い、外来は私が今まで診ていた方々だけに限定して診療をしておりましたが、この方は、それを承知の上で一度是非とも診ていただきたいとのことでしたのでそのように言われるのには、何か訳があるのではと思いお受けしました。新患の方ですから、それなりの診察をさせていただき、終ってからその結果をお話ししました。「今、診せてもらいましたが思っていたより良い経過を辿っていると思います。このまま今の病院で治療を続けられてみて下さい。もし何かありましたら、いつでもおいで下さい」。これに対し「今日は本当にありがとうございました」との言葉が返ってきましたが、ここまでは当たり前の会話でしたが続いて出た彼の話しに、私は愕然としました。「今まで、何件かの病院に行きましたが若い先生はほとんどの人は、訴えを聞くとすぐ血液を採りレントゲンを撮影した後で少し待つように言われます。結果が出るともう一度呼ばれて説明を聞き、薬をいただいて帰るという具合いで何となく物足りない感じが残る有様でしたのがここでは、お話しを聞いていただいたあと、打診とか聴診などでしっかりと診ていただきました。このような診察方法ではもう古いと言われるかも知れませんが、先生がすぐに手を当てて下さるということは、私達患者にとっては本当に嬉しい限りで、何か気分も和らぐ思いでした。ありがとうございました」

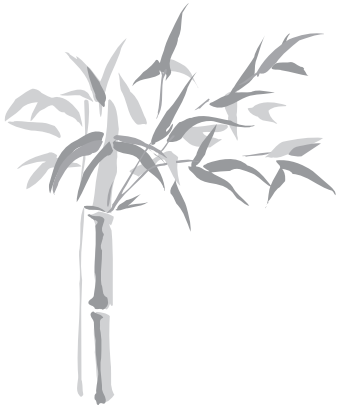
このような心情溢れるお話しを伺いながら、ふと、昔私が北大病院第一内科に入局した時、先輩から聞いた話しを思い出しました。

「君達は、これから医局に入って内科医としての知識と技術を修得していく訳だが、それと同時にどんな時でも心掛けなければいけない問題が3点ある。これを説明するから、例え時間がかかってもよいので、十分に会得して欲しい」と話されました。その第1点は、いつも病院にいて患者さんを迎えること。これは昔から、医者は自分の時間を切り売りする商売だと言われたゆえんです。これは、患者さんにいつ行っても、先生がいて診てもらえるという安心感と信頼感を持たせる結果に繋がり、さらに将来性を高めるためにも肝要でしょう。医師という職業は、いろいろな方面で信頼され、頼りにされる立場になりやすいだけに、常時在住ということは難しい問題ですが、現在の世情からみても、最も配慮しなければならないことでしょう。

第2点は、己の目線を相手と同じに置くということです。お年寄りの方、お若い人と年齢的な問題だけではなく、性格的にはどうかとか、知識関係など、いかに手早く同じ目線でお相手をできるかが必要となって参りますが、これが次の第3点に繋がって参ります。

第3点は、聞き上手になるということです。世の中には、話し上手の人は結構多いようですが、聞き上手という人はあまり居られないようです。一般的に考えても、相手の話しに相槌を打ちながら聞くという仕草は難かしいことですが何も玄人の真似をすることはなく、多少愚痴のまじった話しでもよく聞いてあげることが、先生は私の話しをしっかり聞いてくれたと安心をし、それが信頼関係に結び付くようになっていくことでしょう。

年男といわれても、後期高齢者の私が昔物語を申し上げましたが、何か感じることがありましたら幸いです。



シニカルな視線…サイレントマジョリティの一員として

汪別医師会
北町クリニック　小川　孝

医療崩壊が叫ばれて久しい。

さる11月、高度医療機関がしのぎを削ってひしめき合う都内において、脳出血を併発した臨月の女性を転院させてほしいとのかかりつけ産婦人科病院からの要請に対し、複数の大病院が婉曲に受け入れ拒否を行い、結果たらい回しとなり救命できなかった。背景にある一つの側面には、大野病院事件の深刻な後遺症の影響もあるとの見方もできる。事件以来、産婦人科勤務医の心象内にさらに進んだ訴訟回避意識「明日は我が身…時間外の面倒な出産はできるだけ扱わないにこしたことはない」という部長以下スタッフのオーラを日々感じて日々指導を受けているレジデントは、優等生らしく上司への迷惑な応援召集を掛けぬよう、患者の状況把握よりもフロントの役割として断る方便を優先したのであろう。判決が出て控訴を断念した今、福島県の立件担当検事ならびにその司法関係者、当時初動捜査を起こした担当警察関係者らの中に、自分達のやった仕事が巡り巡って間接的にこのような形でさらなる悲惨な事件への加害的影響力を、地方だけではなく首都圏基幹病院の若手産科医師ひいては日本の産科医療全体にも「さらなる委縮」といった悪影響を与えてしまう結果となってしまったのかも知れない…と、自分の関与した仕事の本質に、微塵でも深く複雑な内省の気持ちを抱いてこのニュースを聞いた人間がいるのであろうか。 この疑問の声がどこかへ届くことは期待はしていない。官吏は「それとこれとはまったく別」とコメントするであろう。

表面的に外から見ると至極まともな社会性を保ち、何食わぬ顔で一生を終えられる人は自己正当性の精神機能が高度に働いているし、心ある感受性ある人間は神経症・うつ病など心を病んでドロップアウトしてしまう欺瞞に満ちた高度資本主義の真っ只中の日本である。子供も高齢者も皆、不安神経障害と背中合わせで今を生きている。

また同じ11月、首相が考えを述べる前段として「医師には常識に乏しい人間が多い」との皮肉の言葉を思わず吐き、翌日すぐに発言を撤回した。

ヒステリックな対立構図として首相個人もしくは現政権うんぬんを議論するのはさておき、視点を変えてここから日本の政策決定権力者達が今までわれわれプロフェッション集団へ抱いていた真意（本音）を嗅ぎとり、そこをわきまえて今後の戦略の糧とすべきとも思う。口にした人物が人物であるという小生の価値観からすると、そのことを差し引いても自分としては冷静な受け止め方である。

今の日本の国民の一人として、また日本医師会の会員という立場上も、さらに医師会から少し距離を置いて一人の医師としての立場から眺めても二重、三重に恥じる気持ちの方がどちらかというと強い。この二重、三重の意味の詳細に関しては感じる会員の方にだけ感じていただければ…と思うのでご想像に任せてあえてこの場で述べるのは避けたい。

官邸主導型をうたって今もって多大な影響力を及ぼす「経済財政諮問会議」と、呼応する財源主導型の政策素案を画策・作成し遂行する財務省寄りの厚生官僚達、そしてそこに乗る政策決定権力者達（政治家）は何らかの有力なる現役医師の『係累』を多かれ少なかれ抱えているものである。意図をもってかあるいは意図せずとも親類・縁者として、または友人・知人として自分個人もしくは自分の家族をも含めて将来何かの役に立つかも知れないと…。眺めてみるとよい。知らず知らずに既に係累へ取り込まれている有力会員もいることであろうし、会員以外の大学医学部教授はもちろん、60才を超えてから就いたポスト上、一応B1会員となっている数百床クラスの自治体病院長・大手民間医療法人の総合病院長クラスも含めて。さまざまな係累と係累との繋がりが綾なす糸はさまざまな機会での仲介と紹介によって、悪意なく無数に絡みあって日々成長している。

リスクを背負いながら自分の足で世の中に立ち続け、自分にできる範囲内で自身の医療理念を日々実践しているA会員の大半は、現状の中で弱気になったり憂いを抱く際、必ず「己の至らなさ」へ思いが及ぶこともあろうかと思われる。しかし周囲を見渡して、ほぼ一生自身の正当性が揺らぐことなどない御仁が一人ならず存在しているのも事実ではないだろうか。

「医師には常識に乏しい人間が多い」自分達医師と仕事上の折衝をする人間は大なり小なりそう思って自分達に接しているのだと肝に銘ずる必要もあろう。たとえ自分が永らく信頼を置いている事務職員のひとりであっても、また自らの配偶者側や子供達の伴侶側の親族の人間であっても大なり小なり同様の目で自分を見ているのだと。相手はそうしてくくることで、自分の感情を抑え、その場で批判したりして余計なあつれきを生まずに引いてくれているのだと常日頃思っていなければならないと思う。

これから「国民の健康の為」と「国民の理解の元」の御旗を巡って、社会保障費の削減政策を食い止めるためのさらなる熾烈で長い長い攻防戦の中では、戦う相手を知ってこそ戦うスタイルをより洗練できてゆくのだと思う。われわれ会員も非会員である勤務医も皆、日々の診療の姿勢を通して、身をもって背中で患者さん達に示

しているのであるのだから、あとは執行部の戦略のセンスであろう。

医師会として内省的な要素を公にすることは、自己否定へと繋がるので非常に困難であろうし、正直期待はしていない。

もしも少し前から内省的態度と、旧態然とした「大兄思想」スタイルからの脱却の意識が、本部で醸成しているのならば、昨今の医師会推薦候補ひとつをとってみても、もう少しは洗練された議会戦略がなされてもいいのではないかと思わされることがあったからである。会合でお仲間とぼやくだけの羊達のようなサイレントマジョリティや、施策へ断固たる反対の声をあげない、あちら側にとって物分かりのよいいわゆる「常識ある」善良なる有名B会員（多くは自身のプライドと待遇を保証されている限り経営の本質には無頓着）をも含めて、大同団結を呼びかけ求心力を高めたいとするのであれば内省的要素を踏まえて変わらなければならないのでは…。すでに医師会の分断・弱体化は意図されて脈々と見えない潮流の中で進みつつあるのであろう。現時点でシニカルにいうならば、それも今の時代なのである。

市井の市民はいつまでも「医師優遇税制」「薬価差益」等のかつての仕組みと、かつての剛腕「〇〇〇太郎」会長の元、いわゆる良き時代に善良さと地域医療貢献によってそれなりに経済的繁栄を享受し子弟を医学部へ進ませた自分達へのイメージをいつまでも持ち続けているであろうからである。

試しに人気クイズ番組へキサゴンではないが、これらの「　」間の漢字を抜いてクイズ問題として出題したら、テレビの前の常識ある年配の市民はおバカキャラのタレントの珍（迷？）解答を笑いつつも、即座に正解を呟くであろう。そのくらいに市井の市民の意識の中へ、医師会として徒党を組むわれわれ開業医集団への偏見が長い歴史の中でこびりついているのである。

「医師達っていうのは本来、医師を志し、それに対して免許証を与えてやってるのだからそれぞれの使命感に従って黙々と働けないものなのか？」と、件の首相はかねてからずっと腹の底で思っていたのであろう。 自分に何か健康上の問題が生じても、即座に都内大学病院の特別室で教授以下優秀な複数の医師スタッフから手厚い治療を受けられることは至極当然、家族も孫も同様との自分の選民意識の上に立ってである。それが自分とは直接関係のない、何処か知らない地方都市の勤務医を含めたマスとしてのわれわれ医師に対する、政治・経済への影響力を持つ有力者達から構成される経済財政諮問会議のメンバー達のそう変わらない意識だと思った方が良いし、十分に係累を確保しているであろう同様の経済界の有力メンバー達も同じ感覚であろう。ビジネスとしてのこれからの医療マーケットとしての拡大には健康産業を含めた事業拡大や資本投下へ興味津々であるが、国民の可処分所得に対する医療費自己負担増や保険料の負担増は内需を減速させ、巡り巡って自分の傘下企業グループの経営への影響を含めて、医師にさらに泣けとジワジワと暗黙の服従を迫る厚労省のしたたかな制度改悪方針を何の痛みも感じずに彼らは容認するであろうから。

行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。

電子メールによる会員への情報提供について
－メールアドレスの登録－

◇情報広報部◇

本会では、インターネットを利用し、電子メールにより緊急性の高い情報を、会員の皆様に送信提供しております。対象は当会の電子メールアドレス利用者全員と他プロバイダの電子メールアドレスをお持ちになっていて、本会にアドレスを登録している会員です。

他プロバイダの電子メールアドレスの登録につきましては、随時受け付けておりますので、是非ご登録いただきたくご案内いたします。

●電子メールアドレスの登録方法

電子メールで、ご氏名、登録メールアドレスを明記のうえ、下記宛お送りください。

・申込先メールアドレス：**add@m.doui.jp**